

ビーバップとその周辺

ジャズと即興演奏

高野敦志

目次

はじめに

《Charlie Parker Story on Dial》	8	1
Charles Parker 《Now's The Time》	18	
Charles Parker 《Swedish Schnapps》	24	
《Bud Powell's Moods》	29	
Dexter Gordon 《Our Man In Paris》	34	
《Sonny Stitt Bud Powell & J.J. Johnson》	37	
《Sonny Stitt sits in with the Oscar Peterson Trio》	41	
Sonny Stitt 《The Hard Swing》	49	

«Jazz Cafe Presents Sonny Stitt»	52	
Art Pepper «Modern Art»	55	
Art Pepper «The Hollywood All-Star Sessions Box Set»		
Art Pepper «Landscape»	59	
Art Pepper «Straight Life»	63	
Art Pepper «Notes From A Jazz Survivor»	69	
John Coltrane & Art Pepper	73	
John Coltrane «Ballads»	78	
«The World According To John Coltrane»	82	
Sonny Criss «Out of Nowhere»	86	
Jackie McLean «Swing, Swang, Swingin' »	89	
	93	
Stan Getz & Kenny Barron «People Time»		
Kenny Barron «Confirmation»	96	
Kenny Barron & John Hicks Quartet «Rythm-A-Ning»	100	
Charlie Haden & Kenny Barron «Night And The City»	105	
The Great Jazz Trio «The Legend of Jazz Live at Blue Note Tokyo»	108	
Fusion of Jazz and Classical music?	112	
East Of The Sun (West Of The Moon)	118	
Wynton Marsalis «The Magic Hour»	123	
Eric Reed «From My Heart»	137	
	144	
		I
		III
		I
		II
		I

Eric Reed 《Plenty Swing, Plenty Soul》
Jasper Van't Hof 《Meditation》
小川隆夫 『名盤のウラに記された真実』
『ジャズの教科書』

160153150147

はじめに

ビーバップ **Bebop** とは何か。一九四〇年代に起こったジャズのスタイルで、神業かみわざとも思える速さで原曲をアレンジし、即興演奏するジャズ一派とも言おうか。日本でジャズというと、帝王マイルス・デイビス **Miles Davis** を思い浮かべる人が多いだろうが、彼を一躍有名にしたモード・ジャズは、ビーバップとは対照的な、浮遊感漂うかすれるような響き。ビーバップ時代のデイビスの演奏なんか、スピードについていくのがやっとなりで、聴いているだけでも気の毒になってくる。

さて、僕がジャズを本格的に聴きだしたのは、大学を卒業してからだが、もう三十年近くも前のことである。自分は演奏を

しないから、楽器に関して詳しいことは分からない。したがって、ここに収めた文章はジャズを論じたものではなく、ジャズをめぐる随想に過ぎない。本来は論じるべきアルバムでも、言葉を失うだけで、ただ感嘆するしかなかったものもある。

一口にジャズといっても、ジャンルは多岐にわたる。大学生の頃までは、もっぱらクラシック音楽を聴いていたから、最初はメロウな曲に惹かれたものだが、次第にビーバップの世界にのめり込んでいった。ビーバップの代表といったら、「ジャズの神様」と言われたチャーリー・パーカー Charles Parker だが、僕の場合はパーカーの弟子であるソニー・ステイット Sonny Stitt から入って、年代をさかのぼる形でパーカーを理解していった。ステイット同様にパーカーの後継者とされるデクスター

・ゴードン Dexter Gordon、ソニー・クリス Sonny Criss やジャッキー・マクリン Jackie McLean、ジョルジュ・ロベール George Robert などのサクソ奏者も聴くようになった。

同じビーバップでも、サクソスからピアノに目を転じると、バド・パウエル Bud Powell の才能が際立つ。パーカーの場合と同様に、若い頃の演奏の方が神がかっている。精神を病んでからは、指が思うように動かなくなっていたが、そこは天才だから、その時点での能力を駆使して、ゆるやかでも味わいある演奏をしている。

パウエルの後継と目されるのは、ケニー・バロン Kenny Barron である。サクソ奏者スタン・ゲッツ Stan Getz の薫陶を受けたと言われるが、ビーバップの精神を継承するピアニス

トである。ケニー・バロンに関しては、スタジオ録音より、ライブでの演奏の方が素晴らしい。観客の反応がピアニストの精神を高揚させ、神が降臨する空間を創出するのである。

スタン・ゲッツに関しては、初期のビーバップでの演奏では、本来の持ち味をまだ生かしていない。本領はラテン音楽のボサノバと思われがちだが、技術は年を重ねるにつれ上がっていく。死の直前の演奏が最高である。その点がチャーリー・パーカーやバド・パウエルと対照的である。

ジャズ演奏家として、最も共感を抱いたのはアート・ペッパー Art Pepper である。前期の抒情的シヤウジヤクな美しさが日本人の心をとらえて放さない。麻薬中毒で長年収監され、奇蹟的に復活した後期は、ジョン・コルトレーン John Coltrane の影響を受け

て、激しく荒削りな演奏に変貌した。前期の演奏に魅せられた人は、余りの変容に言葉を失うが、怒りや哀しみ、悔恨がこもったサククスは、人生の機微をよくつかんでいる。

その他、オルガン奏者のジミー・スミス Jimmy Smith や、ビーバップとは言えないが、周辺に位置するジャス・ミュージシャンについても触れた。パーカーとも共演したピアニスト、ハンク・ジョーンズ Hank Jones、端正なスタイルながら、魂のこもった深い演奏をするエリック・リード Eric Reed についても。即興演奏が命のビーバップとは対極の位置にあるが、逸することのできない味わいとやすらぎを与えてくれる。彼が自立するまで共演したのが、ウイントン・マルサリス Wynton Marsalis である。また、ジャズとクラシックの両分野で活動す

るキース・ジャレット Keith Jarrett や、ヤスパール・ファントフ Jasper Van't Hof なども、逸することができないピアニストである。

なお、アルバムタイトルは ≡ でくくり、曲名は「」に入れて原題を添えた。ただ、ジャズのタイトルは日本語に訳すと、かえって分かりにくくなることが多いので、発音をカタカナで表記するにとどめた場合が多い。紹介する順序も、アーティスト同士の関連を優先したため、年代順や演奏した楽器別になっていない。

二〇一六年八月二日

高野敦志

《Charlie Parker Story on Dial》

チャーリー・パーカー Charles Parker と言うより、愛称のバードと呼んだ方が親しみが湧く。「ジャズの神様」とたたえられ、ビーバップ Bebop という神業のような即興演奏の創始者の一人。アルトサクソスの名手で、「オーニソロジー」Ornithology、¹「ココ」Koko、²「コンファメーション」Confirmation などの名曲を生んだ。

バードの作品はダイアル版、サヴォイ版、ヴァーヴ版に大別される。ステレオが一般化する以前であり、一九四〇年代の録音技術は低く、ノイズがひどい。ダイアル版は最悪だった。そ

れでも、24bit でリマスターされるようになり、鑑賞可能な音質が維持されるようになった。

アルバム《チャーリー・パーカー・ストーリー・オン・ダイアル》Charlie Parker Story on Dial は、一枚目の West Coast Days と2枚目の East Coast Days からなる。サクソスを手にした若き日のバードと小鳥の絵が、ジャケットの表に描かれ、前者が赤、後者が青を主調にしたデザインになっている。一般に取り上げられる曲は、1枚目の West Coast Days に多い。

その中で注目すべき曲を挙げていこう。「ヤードバード協奏曲」Yardbird Suite は、チャーリー・パーカーの愛称を冠した名曲で、のびのびした精神がみなぎり、自信あふれる演奏をしている。もったいぶった名称は、わざと滑稽さをねらうユーモ

アを感じさせる。

「オーニソロジー」Ornithology とは「鳥類学」という意味だが、これもバードという愛称から来ている。かなり奇妙なメロデーだが、実は原曲「海は何と深いんだろう」How Deep Is The Oceanのアレンジである。なお、バードのライブには「オーニソロジー」のヴァリエーションがあり、自分としてはオン・ダイアルのオーソドックスな演奏より、≪ライブ・アット・ザ・ロックランド・パレス≫Live At The Rockland Palaceの乗りに乗ってぶっ飛んだ方が好きである。

「チュニジアの夜」Night In Tunisia はディジー・ガレスピー・Dizzy Gillespie が作曲したジャズ名曲中の名曲。「フェーマス・アルト・ブレーク」Famous Alto Break はその冒頭で、バード

最高の演奏であるが、他のメンバーの不調で中断されたもの。あまりに素晴らしいので、冒頭の部分だけが収録されている。

「ラバー・マン」Love Man は麻薬を切らしたバードが、泥酔状態で演奏したもの。へべれけだったせいで、出だしから遅れている。神業の演奏とのギャップに啞然あぜんとしたが、泥酔でもここまで演奏できるのかと、逆に感動させられる。「ジャズの神様」の人間としての一面が垣間見せられ、かえってバードへの親しみが湧く。この曲は≪スウェディッシュ・シュナップス≫Swedish Schnapps にも収録されているが、こちらは余りにも普通すぎる演奏で感動しない。

「ジプシー」The Gypsy も泥酔状態での演奏。バードの悲哀の感情、自身の運命への予感まで感じさせるが、実際の出来はガ

タガタである。この曲の演奏に関しては、オスカー・ピーターソン Oscar Peterson のピアノと共演したソニー・ステイツト Sonny Stitt の方に軍配が上がる。

「ゴーパープ」Behop はパーカーやガレスピー、バド・パウエル Bud Powell が確立した即興演奏のスタイルを冠した曲。勇ましい行進曲をイメージさせる軽快なメロディーが特徴である。

1 枚目の West Coast Days には「デイス・イズ・オールウェイズ」This Is Always のように、コーラスとの共演も含まれる。一九四〇年代の古めかしいメロディーが、バードの生きた時代を彷彿させる。

2 枚目の East Coast Days は、バードの実力全開の作品が並ぶ。一枚目の West Coast Days ほど、出来不出来の差が大きいので、全体を安心して聴いていられる。

冒頭の「デクステリティ」Dexterity は、機敏さという意味だが、バードの目にも留まらぬ早業はやわざが聴ける。演奏の速さとメロディーの美しさでは、「プリズロジー」Prezology も負けていない。でも、これはバードの造語なのか？ 語末を見ると、何かの学問を表しているようなのだが。しち難しい名で煙けむに巻いて、得意になっている顔が目につかぶ。

「バード・オブ・パラダイス」Bird Of Paradise は、楽園の鳥という意味に読めるが、楽園にいるバードということなのか？ 自身の運命を受け止めているような、短調の雰囲気の曲で、

それだけに重苦しささえ感じさせ、真摯しんしに自分と向かい合う姿勢が感じられる。

「スクラップル・フロム・ザ・アップル」Scrapple From The Apple はバードが作曲したビーバップのスタンダード曲。軽快なリズムで陽気な掛け合いをしている雰囲気。ただ、これに関してもやはり、ソニー・ステイットがオスカー・ピーターソンと共演したクールな演奏の方が、洗練されている気がする。ちなみに、スクラップルとは豚肉のこま切れにトウモロコシ粉を混ぜて揚げた料理。バードにとって曲名とは、マークのようなもので大した意味はない。

「マイ・オールド・フレイム」My Old Flame では、バードは即興演奏のアレンジは控えめに、抒情的なメロディーを歌い上げていく。その点では、「アウト・オブ・ノーフェア」Out Of Nowhere も同じで、サクソスの美しい音色を生かしている。ただ悲哀を帯びた叫びが生かされているのは、ヴァーヴで録音した《パリの四月》April In Paris 所収の演奏の方である。

僕の勝手な印象を言わせてもらうと、East Coast Days でバードの絶頂が味わえるのは、冒頭の数曲と、後に述べる末尾の数曲で、真ん中の曲はバードにしては平均的な出来である。

「リードの上を漂う」Drifting On A Reed あたりからは調子が上がっていく。快活さが前面に出てくるから、聴いている方の気分も高揚する。「チャーリーのかつむい」Charlie's Wig というのも、へんてこりんなタイトルだが、メロディーの方も実験的で、何か一つの思いを表現しようというのではない。ダダイス

トの詩みたいで、音色が面白いから吹いているのであって、○
○の意味があるとかは関係ない。変幻自在なところに、絶頂期
のバードらしさがある。

「ボンゴ・ビープ」Bongo Beep でゆったり弾いた後は、East
Coast Days の中で、もつとも超絶的な即興演奏が光る「クレ
ジオロジー」Crazecology が来る。これはバードの造語なのだろ
う。熱狂学とでもいうべきか。ヴァーヴ時代のバードも、それ
なりにいい演奏をしているのだが、ダイアル時代が余りにも
すごく、ぶっ飛んでいるので見劣りしてしまうのである。

ダイアルに続くサヴォイの時代も、「ココ」Koko や「パーカ
ーのムード」Parker's Mood などの名曲が生まれている。とは
いっても、変幻自在の輝きは衰えを見せ始めている。バド・パ

ウエル Bud Powell の場合と同様に、いきなり最高のものを生
み出して、徐々に実力に陰りが現れる、天才の宿命をたどって
いったのではないか。

Charles Parker 《Now's The Time》

チャーリー・パーカー Charlie Parke のアルバムは、前期のダイヤル版やサヴォイ版において、想像力豊かな即興演奏の連続で、音の魔術に目がくらむ思いがする。文学で言うなら、前衛的な即興詩であり、分かる奴には分かる世界だから、パーカーの音に聴き慣れていないと、わけの分からぬ外国語を聴かされている気になる。聴けば聴くほど味わいがあると知るのは、パーカーのサククスが出す音の変化に、ついていけるようになってからである。

初めてパーカーを聴くなら、後期のヴァーヴ版がオススメである。録音はモノだけでも、雑音がなくこもった感じが無い。

ヴァーヴのアルバムの中では、《パリの四月》April in Paris あたりが無難かもしれないが、オーケストラのメロウな演奏に、ちよこちよこサククス鳴らしてるだけじゃないか、オーケストラ自体が邪魔だという意見もある。オーケストラの演奏に合わせて、限られた範囲で即興演奏しているんだから、パーカーにとっては挑戦だったんじゃないかって気もする。たまには聴きたくなるアルバムである。

ムード音楽みたいな曲、吹いているパーカーなんか聴きたくないという人には、前期の輝きが生きていて、音質もいい《バード・アンド。デイズ》Bird and Diz あたりがいいのだが、これはディジー・ガレスピー Dizzy Gillespie との掛け合いだから、初心者向きではない。すると、(ハ)で紹介する《Now's The

Time》が、最適なのかもしれない。

録音状態がよく、サクスの微妙な音の変化がすべて聴き取れ、乗りに乗った演奏をしているので、晩年の演奏に見られる衰えが感じられない。初期の目もくらむ乗りがある一方、メロディーで一つのイメージを作ろうという意思も感じられる。散文詩の世界といったところか。

冒頭の曲「ザ・ソング・イズ・ユー」The Song Is You は、日本語に訳せば「歌こそ君だ」となり、相手を愛する思いを歌になぞらえている。パーカーにしては、比較的小となしめの演奏である。3曲目の「キム」Kim は、パーカーの妻、チャン・リチャードソンの連れ子（パーカーにとっては義理の娘）の

名である。強烈なパーカッションで大見得切るといった調子で始まる。

このアルバムは後半に行くほど、パーカーの演奏は乗りに乗っていく。「チ・チ」Chi-Chi はディスクジョッキーが同伴する女友達に、パーカーがつけたあだ名で、別テイクを含めて4回も演奏されるが、全身で自己表現している快活さがあり、繰り返し聴いても飽きが来ない。

11曲目「アイ・リメンバー・ユー」I Remember You も、愛する人への思いを表現した曲。日本語に訳すなら、「君のこと、覚えているよ」よりは「君を忘れない」ぐらいに、否定文で表した方がしっくり来る。高揚した気分と抒情的な細やかさが一体となった美しい曲。このアルバムの中で、一、二を争う絶妙

な演奏である。12曲目の「ナウズ・ザ・タイム」Now's The Time は、サヴォイ版でも演奏されているが、乗りの良さはヴァーヴ版のこの演奏が数段上である。クールに決めていて、自己の技術を使いこなす自信がみなぎる。

最後の13曲目を飾るのが、パーカーの代表作の「コンファメーション」Confirmation である。確認とか、キリスト教の堅信礼のことか、よく分からない命名だが、パーカーにとつては曲の名前も即興の思いつきだろうから、大して重要ではない。即興演奏の技とメロディアスな美が共存し、多くのアーティストが演奏するスタンダード・ナンバーとなった。

同じ曲の別テイクを、続けて4回も聴かされたくない人は、別テイクを除いた全8曲のアルバムが《チャーリー・パーカー》

Charlie Parker の名で出ている。曲の並び方は異なるけれども、時間のないときなどはショート・バージョンの方のアルバムも、同様の陶醉を与えてくれる。

Charles Parker 《Swedish Schnapps》

「ジャズの神様」と崇められながらも、サククスを吹きまくって三四歳の若さで死んだチャーリー・パーカー Charlie Parker がどんな人物であったかは、映画『バード』をご覧になった方ならご存じだろう。『マイルス・デイビス自伝』の前半でも、チャーリー・パーカーに関する記述が多く見られる。もし身近にいられたら癖が強すぎて、周りの人間はちよつと大変である。

山田洋次の映画『男はつらいよ』シリーズに、印刷所の社長が、寅さんが現れると聞いて、「とらや」の人たちに「ご愁傷様」としゃべる場面があったが、チャーリー・パーカーも似たようなものだろう。マイルス・デイビス Miles Davis をバンド

に入れたのも、どうやらマイルスの父親が医者で、金づるになると思っていたような節がある。マイルスの荷物を無断で売り払ったりしたのだから、偉い先生の下で働くのも大変である。

さて、チャーリー・パーカーを初めて聴こうとする人に、どんなアルバムを勧めようか。演奏技術やアドリブの素晴らしさからいくと、初期のダイヤル版やサヴオイ版が優れているのは確かだが、現在の水準から比べて録音状態が芳しくない。それに、鳥の羽ばたきみたいに、目まぐるしく変化するアドリブを聴き取るには、チャーリー・パーカーの音楽に聞き慣れている必要がある。

モノの録音とはいえ、現在聴いても遜色がないのは、晩年のヴァーヴから出したアルバムである。チャーリー・パーカー

の愛好者は、ヴァーヴ版への評価が低い。ダイヤルやサヴォイで出したアルバムと比べて、想像力が低下して、アドリブの冴えも衰えて、時にはおざなりの演奏をしているというのだ。確かにその印象はぬぐえないのだが、それは年々悪化していった体調のために、出来不出来のむらが大きいからである。

スタンダードが多く録音されている《パリの四月》April in Paris などは、オーケストラに合わせてサククスを吹いているので、アドリブをするのにも限界があるのだが、無難に楽しめるアルバムである。《ナウズ・ザ・タイム》Now's The Time も美しい作品で、代表作の一つ、「コンファメーション」Confirmation が収録されている。《バード・アンド・デイズ》Bird And Diz は、ビーバップの盟友、ディジー・ガレスピー

Dizzy Gillespie と共演したものだが、負けず嫌いの二人の競演で、演奏の技術は甲乙つけがたい。

前期の緊張感を、ヴァーヴのアルバムで聴きたいなら、《スウェデッシュ・シュナツプス》Swedish Schnapps ということになるが、問題がないわけではない。何度聴いても、このアルバムの前半と後半とは、乗りの良さが全然違うのである。「シシ」Si Si から始まる演奏は、無難に吹いているだけで、大して冴えは感じられない。「ラバー・マン」Lover Man はダイヤル版が泥酔しながらの演奏で、テンポはずれのへなへななのに、自己の運命を悟りながら、悲痛な情感をたたえているのに感動してしまう。それに対して、ヴァーヴ版ではただの通り一遍の演奏である。拍子抜けするほどつまらない。

チャーリー・パーカーの調子が上がってくるのは、後半の「オー・プリヴァーヴ」Au Privaveあたりからである。そして、「シー・ロート」She Roteからは絶頂の演奏になる。もろぶっ飛んで神がかり状態である。「スター・アイズ」Star Eyes、「セグメント」Segment、「ダイヴァース」Diverseも素晴らしいが、これらの曲は《ジャズ・パレニアル》Jazz Perennialというアルバムでも聴くことができる。

《Bud Powell's Moods》

ビーバップ Bebop というのは、凄まじい勢いで即興演奏をするジャズのスタイルで、サックスのチャーリー・パーカー Charlie Parker やトランペットのディジー・ガレスピー Dizzy Gillespie、ピアノのバド・パウエル Bud Powellらが生み出していた。

バド・パウエルはチャーリー・パーカーと同様の天才肌で、一九四〇年代から五〇年代初頭にかけて、神業のような華麗な即興演奏を見せた。その後は精神的な病と、麻薬とアルコールの中毒に苦しみ、治療で受けた電気ショック療法と、警官に頭部を強打されたことで、ピアノを弾く際に指がもつれるように

なり、四〇代前半で結核、栄養失調、およびアルコール中毒で亡くなった。

パウエルは奇行でも知られており、クラブでピアノを弾くのをやめて、立ち上がって弾くまねをしたりした。聴衆は当惑するばかりで、しまいには、店員にゴミのように路上へ投げ出され、自動車の下に猫みたいに隠れて、おびえきったこともあったという。

僕が主に聴くのは最盛期の演奏で、パウエルの名盤、ベスト3を示せと言われたら、《バド・パウエルの芸術》Bud Powell Trio、《ジャズ・ジャイアント》Jazz Giant、《アメージング・バド・パウエル1》The Amazing Bud Powell, Vol. 1を挙げる。共演したアルバムとしては、ソニー・ステイット Sonny Stitt

のサククスと弾いた《ソニー・ステイット、バド・パウエル、J. J. ジョンソン》Sonny Stitt Bud Powell & J. J. Johnson が卓越している。

一九五〇年代の半ば、かつての天才ぶりが薄れかけた頃、パウエルは今までの即興演奏とは、いささか雰囲気異なるアルバムを出している。それがここで紹介する《バド・パウエルのムーズ》Bud Powell's Moods である。これは一九五六年にNorgan からリリースされたものである。

ちなみに、全く紛らわしい話だが、Mercury から同名の異なるアルバムが、しかも同年に出されており、後者は、のちに《ザ・ジニアス・オブ・バド・パウエル》The Genius of Bud Powell

と改名されている。僕が今取り上げるのは、前者のアルバムの方である。

凄まじい勢いのパウエルは、すでにここにはない。神々しい輝きとは異なる、魔法のような磁力を帯びている。夜の美しさを表現した感じで、石川賢治の写真集に『月光浴』というのがあるけれど、そのイメージにぴったり合いそうな世界である。

アルバムの表紙からして、現実離れしている。パウエルの顔の輪郭なのだろうか、左右の対つひになった顔が、火と水を象徴するように、赤と青に色づけされている。冒頭の曲、「ヴァーモントの月」Moonlight In Vermont と、2曲目の「スプリング・イズ・ヒア」Spring Is Here は、魂を温かく癒いやすす静の音楽である。それに対して、3曲目の「バターカップ」Buttercup や4

曲目の「ファンタジー・イン・ブルー」Fantasy In Blue はクールな動の音楽といったように、曲ごとに演奏に変化、めりはりをつけている。6曲目の「ア・フォギー・デイ」A Foggy Day は、軽快なリズムの中に、男性的なエロスが漂っている。七曲目の「タイム・ウオズ」Time Was は、ゆったりした女性的な魅力にあふれている。全体の構成がどうなっているかは、ご自分の耳で確かめていただきたい。

神業のような即興演奏だけがパウエルだ、という先入観を抱いていた僕は、ゆるやかな落ち着いたムードの中で、自身の精神世界に沈潜していく、もう一人のパウエルを発見した。指が以前のように動かなくなってきたも、限界の中で最高のものを生み出せるのは、やはりパウエルが天才だからだろう。

Dexter Gordon 《Our Man In Paris》

ソニーが経営する mora で、ブルーノートのハイレゾ音源の配信が始まった。第1回で僕がダウンロードしたのが、ルディ・ヴァン・ゲルダー Rudy Van Gelder (RVG) がリマスターした、このアルバムだった。

デクスター・ゴードン Dexter Gordon は、官能的なサクソ演奏を残している点で、ビーバップ Bebop の奏者の中では異色の存在である。ピアニストのバド・パウエル Bud Powell、ドラマーのマックス・ローチ Max Roach やアート・ブレイク Art Blakey と共演しており、奏者としての活動以外に、バド・パウエルをモデルにしたとされる映画『ラウンド・ミッド

ナイト』Round Midnight で、主人公のジャズ・ミュージシャンを演じている。

《アワ・マン・イン・パリ》Our Man In Paris の魅力は、「スクラップル・フロム・ジ・アップル」Scraple From The Apple や「柳よ泣いておくれ」Willow Weep For Me、「チェニジアの夜」A Night In Tunisia など、ボーザップ本場の演奏を、192KHz/24bit の高音質、ステレオ録音で聴けるという点にある。チャーリー・パーカー Charlie Parker を彷彿させる、すさまじい勢いの即興演奏を、パーカーとは異なるテナー・サクソスの渋い響きで、バド・パウエルのピアノとともに味わえる名盤である。

これらの力強い演奏とともに、「ブロードウェイ」Broadway のクールで妥協のないムードや、「星へのきざし」Stairway To

The Stars の夢想到誘う響きにも、あふれる才能がみなぎっている。

《Sonny Stitt Bud Powell & J. J. Johnson》

ソニー・ステイット Sonny Stitt、本名 Edward Boatner, Jr. は、一九四三年にチャーリー・パーカー Charlie Parker と出会って、サックスの演奏法が驚くほど似ていることに気づく。即興演奏に関しては、むしろ、パーカーよりも旋律が美しく、調和が取れているとまで言われたが、一本気なステイットはあふれ出る想像力の面では、パーカーにはかなわなかったのだろう。また、ステイットの絶頂は一九五九年であり、その後はマンネリズムに陥り、サックスの音も力強さと安定感が欠けていったから、最盛期のパーカーと晩年のステイットを比較するのは酷である。

一九四〇年代末に麻薬に関するトラブルで、ステイットは危うく殺されかけた。また、密売のかどで、レキシントン刑務所に収監されている。出獄して間もなく、ステイットの最初の名盤《ソニー・ステイット、バド・パウエル、J.J.ジョンソン》*Sonny Sitt Bud Powell & J. J. Johnson* が出る。参加したアーティストが羅列られつされているだけの、素っ気ないタイトルのアルバムだが、ソニー・ステイットと、バド・パウエルの最高の共演が聴ける。

当時はステレオ録音が存在しなかったばかりか、現在と比較すると劣悪な記録方法しかなかった。モノラルでも現代人の鑑賞に堪える録音が始まったのは、一九五〇年代に入ってからである。したがって、LP をそのまま CD 化したこのアルバムを

聴いた人は、この演奏の素晴らしさを聴き逃したかもしれない。もし、関心を持たれたなら、DSD (Direct Stream Digital) でデジタル・リマスターを施したCDを買った方がいい。ステイットのサクスがパーカーに負けないほど、凶太い音だったことが分かるし、神がかっていた頃のパウエルの乗りに乗った演奏が聴ける。どの曲も生氣あふれて張りがあがるが、前半の曲の方が精彩が感じられるし、雑音も気にならない程度である。

冒頭の「神の子は皆踊る」*All God's Children Got Rhythm* は、力強さ、スピード感、高揚した乗りといった点で申し分がない。2曲目の「ソニー・サイド」*Sonny Side* からは、ややブルーな感じの演奏に変わる。4曲目の*Sunset* 「サンセット」は憂愁のムードが漂うが、美しさの面では他の曲を圧倒する。ステイ

ットはメロディアスなサククスで、高らかに歌い上げている。5曲目の「フライン・アンド・ダンディ」Fine And Dandyも、乗りの良さでは1曲目に負けていない。ステイットの青春が躍動している。9曲目の「恋のチャンス」Taking A Chance On Loveまでは、おおむね好調な演奏が続いている。

このアルバムのタイトルにもなっている J. J. Johnson は、トロンボーンの第一人者で、10曲目の「アフタヌーン・イン・パリ」Afternoon In Paris 以降に参加している。ここでピアノも、バド・パウエルからジョン・ルイス John Lewis に交替している。両者には申し訳ないのだが、後半もステイットの調子は続いているものの、このアルバムの魅力は、ステイットとパウエルの才能がぶつかって火花を散らしたところにある。

《Sonny Sitt sits in with the Oscar Peterson Trio》

高田馬場から跡形もなく消え去った予備校に通っていたのは、一九八〇年代も初頭の頃だった。現代国語を担当していた先生が、次のような話をしてくれた。私の姉は、世界で最も偉大な作家は、山本周五郎だと思っているんですよ。自嘲気味な語り口が印象に残った。日本文学を研究している人間にそんなこと話したら、馬鹿にされるに決まっている。だからといって、山本周五郎の小説は結構人気があつて、何度も芝居で上演されたり、テレビドラマ化されている。現にこの自分も、高校に入学する頃までは、『赤ひげ診療譚』や『樅ノ木は残った』などを読んでいたのだが、谷崎潤一郎や三島由紀夫を知ってから

は、ぱったりと関心が薄れてしまった。僕が大学に入るのは、本格的に文学の勉強をするためだったのだ。

その頃、まだソニー・ステイット **Sonny Sitt** は生きていた。最も偉大なジャズ演奏家の名前を尋ねられたら、チャーリー・パーカー **Charlie Parker** だと、今の僕なら答えるわけだが、最もアルバムを持っているのは、実はソニー・ステイットなのである。アルバムを数えてみたら、何と六十以上もあった。

パーカーの音楽を聴くようになったのは、ステイットの演奏になじんだずつと後だった。でも、ジャズ愛好家に、ステイットの名を挙げるのは、ためらってしまいそうになる。ステイット自身もコンプレックスを抱いていて、パーカーの亜流とみられることを忌み嫌っていた。パーカーの生前は、そうした評価

を払拭^{ふっしょく}するために、アルト・サククスからテナー・サククスに楽器を変えていたほどである。ただし、パーカーと演奏スタイルが似ているのは、模倣したからではなく偶然の一致だったというのが、本当のところだったらしい。

チャーリー・パーカーのサククスが変幻自在だとすれば、ソニー・ステイットのサククスは一本気である。管楽器は瞬間に一つの音しか出ていないはずだが、パーカーの音は夢幻に誘う万華鏡^{まんげきょう}を見るようだ。ステイットの音はメロディーにロココ調みtainな装飾がついている。やたらに速いだけだったり、けだるげな演奏で、アドリブもおおざなりだったりする。

《ステイット・プレイズ・バード》Stitt Plays Bird というアル

バムで、ステイットはパーカー（＝バード）の呪縛から逃れるべく、あえてバードの曲ばかり演奏した。パーカーの代表作「オーニソロジー」Ornithology をステイットによる演奏と、〈チャーリー・パーカー・ストーリー・オン・ダイヤル〉Charlie Parker Story On Dial のパーカーによる演奏を比べると、ステイットの音は気の毒なほど見劣りしている。正面切つての対決では、パーカーにかなうはずがないのである。

ステイットは天才肌ではない。かなりいい線いつている時と、何だこりや？ といった演奏しかしていない時がある。還暦前に亡くなっているのに、恐ろしいほど多作である。文章の場合、はたぐさん書いていないと、いいものは出てこないらしいが、ジャズの場合はどうだろう。恐らくステイットは、満足いかな

いような演奏でも、アルバムに収録してしまっているのだろう。しかも、一九六〇年以降はマンネリズムに陥り、音も不安定な時が少なくない。

かといって、ステイットの存在は軽視することができない。帝王として恐れられたマイルス・デイビス Miles Davis と互角かくに語り合えたのもステイットである。アート・ペッパー Art Pepper は自伝『ストレート・ライフ』Straight Life の結びで、次のように述べている。

「僕らは二人共アルトを演奏する。まさに、競争だった。だが、ソニーも並のプレーヤーではなかった。二人の演奏は、魂と魂のぶつかり合い、技の競い合いだ。それがデュエットのすばら

しさだ」

その日のステイットの演奏について、「サククスで吹けるおよそあらゆる技術が盛り込まれていた。もしあそこにチャーリー・パーカーがいたとしても、あれ以上のことは出来なかっただろう」とも付け加えている。

ステイットの名盤とされるアルバムは、一級のジャズ演奏家との共演で生まれている。《ソニー・ステイット、バド・パウエル、J. J. ジョンソン》Sony Stitt Bud Powell J. J. Johnson という素っ気ないタイトルのアルバムでは、二〇代前半のみずみずしいステイットと、まだ神業の演奏をしていたパウエルが聴ける。録音状態がいま一つなのが残念であるが。

ここで紹介する《ソニー・ステイット・シッツ・イン・ウィ

ズ・オスカー・ピーターソン・トリオ》Sonny Stitt sits in with the Oscar Peterson Trio も、神がかった演奏をするピアニスト、オスカー・ピーターソンとの共演である。絶頂期に達していたステイットは、最良の乗りの良さを見せている。「捧ぐるは愛のみ」I Can't Give You Anything But Love や、「オー・プリヴァーヴ」Au Privave、「ジプシー」The Gypsy、「四月の想い出」I'll Remember April、「スクラップル・フロム・ジ・アップル」Scrapple from the Apple など、スタンダード曲は、どれも耳に快うつくいものばかりだが、この中で最良と思われるのが「ジプシー」である。魂がこもった演奏とはこのようなもので、心の微妙な揺れから広がりまで、繊細な息づかいでまとめ上げている。チャーリー・パーカーの《チャーリー・パーカー・ストーリー

ー・オン・ダイヤル》Charlie Parker Story On Dial には、泥酔したまま演奏した「ラバー・マン」*Lover Man*と「ジプシー」が収録されている。前者は極限状態で必死に吹いている姿が、多くのファンの心を動かしてきたが、後者は力なく頼りない面ばかりが目立つ。ステイットの「ジプシー」は、傷心の魂を凜然りんぜんと表現している。ステイットの演奏がパーカーに勝った数少ない例である。

Sonny Stitt 《The Hard Swing》

ジャズでスウィングというと、躍動感あふれるリズムに乗ることを指す。確かにソニー・ステイット Sonny Stitt の演奏の中でも、最高にノリノリである。一九五九年の録音であり、多作のステイットにおいても、最も充実した時期の演奏である。《ソニー・ステイット・シッツ・イン・ウイズ・オスカー・ピーターソン・トリオ》Sonny Stitt sits in with the Oscar Peterson Trio や《ア・リトル・ビット・オブ・ステイット》A Little Bit of Stitt などの名盤も、この年に録音されている。

《ハード・スウィング》The Hard Swing は乗りの良さもさることながら、スタンダードな曲が多く収められており、親しみや

すいアルバムである。チャーリー・パーカー Charlie Parker とよく比較されるステイットだが、晩年のやや不安定なサクセスと比べて、しっかりとした図太い音で、自信に溢れた演奏をしている。

1 曲目の「アイ・ガット・リズム」I Got Rhythm と 4 曲目の「イフ・アイ・ハド・ユー」If I Had You、5 曲目の「四月の想い出」I'll Remember April、7 曲目の「アフター・ユーズ・ゴーン」After You've Gone、11 曲目の「チューン・アップ」Tune up がとりわけ素晴らしい。「Tune up」に関しては一九七二年に出た名盤 ≪チューン・アップ≫ Tune up よりも、このアルバムでの演奏の方が力強く美しい。

音質に関しても 24bit でリマスターしており、ステイットの

アルバムの中で最良に属する。たまに再版される程度の希少版であり、ステイットのファンだったら、見かけたときに買っておくといい。

《Jazz Cafe Presents Sonny Stitt》

パーカー派のジャズ・サククス奏者で、演奏の腕に限って言えば、師のチャーリー・パーカー Charlie Parker に引けを取らなかつたソニー・ステイット Sonny Stitt だが、ここで紹介する作品は、傑作のアルバムを多く出した一九五九年の前年に、シカゴで録音されたものだという。

多作のステイットはともに組んだ演奏者を、記憶していないことがある。このアルバムのピアノ奏者は、後年の傑作《チューン・アップ》Tune Up でも共演したバリー・ハリス Barry Harris であると推測される。絶頂の時期の演奏であるだけに、乗りの良さは折り紙つきと言っている。しかも、ステイットに

しては珍しいライブ演奏なので、観客の反応も聴き取れるし、録音状態も良好である。

1 曲目の「ソニーのブルース」Sonny's Blues はステイットのファンにはお馴染みの曲で、聞き慣れた演奏だが快調な滑り出しである。2 曲目の「オールド・フォークス」Old Folks はステイットの抒情性がよく出ており、ゆったりした演奏と巧みな技術が融合して、ステイットの歌心を十分に楽しめる。3 曲目の「ラックス」Lax では、パーカー顔負けの凄まじい早業を披露している。

4 曲目の「イエスタデーズ」Yesterdays は一転して、ステイットらしいブルーなムードを醸し出す。5 曲目の「ホワッツ・ニュー」What's New? はビル・エヴァンス Bill Evans のピアノ

演奏が有名だが、ステイットのブルーな抒情性を、お決まりの演奏で済まさず、より深化させた点で聴き応えがある。6曲目の「フォー」Four はマイルス・デイビス Miles Davis のほのぼのとした演奏とは違った、ビーバップ Bebop を前面に出した、クールなステイットらしさが生きている。

どれも短い演奏で三十分余りのアルバムであるが、ステイットのファンならぜひ揃えておきたい快作である。現在、CD は品切れ状態だが、iTunes Store から安価で購入することができ

Art Pepper 《Modern Art》

チャーリー・パーカー Charlie Parker に次ぐサクソ奏者として、華々しくデビューしたアート・ペッパー Art Pepper は、活動期が大きく二つに分けられる。日本で人気があるのは、前期の繊細で美しいアドリブのおかげだろう。もちろん、後期の演奏には悲しみと怒りの真情があふれているが、荒削りの絶叫を耳にしたら、前期の快いサクソスの響きは、どこに行ってしまったのか、耳を疑ってしまうかもしれない。サクソスの演奏は肺活量にも左右されるから、外れたような音を出すのは、年とともに衰えていった体力と関係があると思われる。

前期の名盤はいくつかあるが、最高のアルバムは《アート・

ペッパー・シーツ・ザ・リズム・セクション」Art Pepper Meets The Rhythm Section であるというのが、世界的な定評であるらしい。確かに「イマジネーション」Imagination や「スター・アイズ」Star Eyes、「好きな人」The Man I Love の美しさは超絶しているといっている。ただし、アルバムとしてはまとまりが今一つという感じがしないでもない。

日本人の多くが愛している前期の名盤は、『モダン・アート』Modern Art であると思われる。スーツを着て耽美的なムードに浸るジャケット自体も、魅力の一つになっているが、「ブルース・イン」Blues In から、「魅せられて」Bewitched、「君微笑めば」When You're Smiling を経て、「ダイアンのジレンマ」Dianne's Dilemma、「恋とは何ぞしやる」What Is The Thing Called

Love? そして終曲の「ブルース・アウト」Blues Outへと到る内向的な解放感とまとまりの良さが、日本人の心をとらえて放さないのだろう。これはアナログ版と同じ構成である。

ただし、『モダン・アート』を購入する際には、気をつけなければいけないことがある。20bit 88KHzでリマスターしたのは、針がLPを擦っているような音が絶えずして、いかにも古い音源だと感じるからである。したがって、24bitでリマスターされたものを買うべきである。格段に音質が向上している。雑音が消えて音に張り厚みが出て、サックスの音そのものを堪能できる。HQCD版も高音質だろうが、2001年に出た Limited Edition では、「ダイアンのジレンマ」の別テイクと、「サマータイム」Summertime もボーナスとして収録されている。その

分、HQCD版よりはお買い得になっている。

その一方で、「ビギン・ザ・ビギン」Begin The Beguineなど、さらにポーナス・トラックを含んだ版もあるが、アナログ版の演奏順序を無視しているし、耽美的なイメージをぶち壊しているのでお勧めできない。

Art Pepper 《The Hollywood All-Star Sessions Box Set》

アート・ペッパー Art Pepper とソニー・ステイット Sonny Stitt は、ともに秀逸なアルト・サクソ奏者で、アート・ペッパーが一九二五年に、ソニー・ステイットはその前年に生まれた。没年はともに一九八二年である。二人は友人であり、相手の能力を認め合っていた。

日本人の多くは、前期ペッパーの繊細で心地よい、夢見るようなアドリブが好きだろう。その最後を飾るのが、一九六〇年の《インテンシティ》Intensity であるが、後期ペッパーへの予兆が、荒々しい吹き方に感じられないだろうか。ジョン・コルトレーン John Coltrane の影響を受けた後期は、鋭い棘とげのある

ような力強く大胆な演奏になった。悲しみや怒りといった生の感情は、後期の方が生き生きと感じ取れるのだが。

ソニー・ステイットに関しては、チャーリー・パーカー
Charlie Parker の亜流だと、過小評価されがちであるが、一九五〇年代までの演奏は皆素晴らしく、一九六〇年以降はマンネリズムに陥り、音も以前と比べて力強さがなくなった。サクソスをテナーに変えたり、電子サクソスのヴァリトーンをジャズで用いるなど、異なる楽器によって演奏に変化をつけたが、チャーリー・パーカー流の目まぐるしいアドリブか、レスター・ヤング Lester Young 流のリラックスした演奏のいずれかを選んでいて、スタイル自体が一生のうちに大きく変わったわけではない。

信頼し合っていた二人だが、ともに共演する機会はまれだった。数少ない記録を収めたアルバムが、ソニー・ステイットの《ブルービン・ハイ》Groovin' High である。一九八〇年に録音され、LP は中古品で売っていたが、デジタル化されたかどうか分からず、連日インターネットで情報を集めていた。同名の CD は見つからずじまいで、半ば諦めかけていたところ、アート・ペッパーのアルバム《ハリウッド・オールスター・セッションズ・ボックス・セット》The Hollywood All-Star Sessions Box Set として、デジタル化されていた。

5 枚組のボックスの中に、《ブルービン・ハイ》のアルバムも含まれている。アート・ペッパーもソニー・ステイットも、ともに衰えを感じさせない生き生きとした演奏をしている。共

演というよりは競演で、二人とも競い合つてエネルギー全開といった調子である。流麗に伸びるソニー・ステイットの音と、その流れを掻き乱すように渦巻くアート・ペッパーのかけあいは、美しさの底に極度の緊張が感じられる。

Art Pepper 《Landscape》

最近、コルグの DS-DAC-100m を買って、AudioGate で DSD 5.6MHz に変換して音楽を聴くようになった。AudioGate で 192 KHz に変換した曲もそれなりに良かったが、DS-DAC-100m で DSD 5.6MHz で聴くと、その差は歴然としていた。

考えられる原因は、たとえ高音質に変換しても、パソコンの安っぽい部品がアナログの音声にしたのでは、限界があるというところだろう。その証拠に DS-DAC-100m を介した形で CD 44.4KHz を再生すると、DSD 5.6MHz ほどの透明感はないものの、それなりの迫力で聴けるからである。とはいっても、本格的なオーディオで聴くのでなければ、CD を DSD に変換して聴く

のが、現時点では最良の方法であるように思える。もちろん、録音状態の良いステレオの場合を言っているのであって、元の録音に雑音が入っていると、高音質化の段階で、かえってそれが増幅されてしまう。

さて、後期ペッパーの音楽は、前期ペッパーの美しいサククスに魅せられた人には評判が今一つのものである。ただし、それは mp3 のような圧縮音源で聴いているからではないかという気がした。

アット・ペッパー Art Pepper が一九七九年東京芝郵便会館で録音した《ランドスケープ》≒ Landscape を、DSD 5.6MHz に変換して聴いてみた。ペッパーの太いサククスに圧倒されてしまい、mp3だと単に音程が外れたようにしか聞こえなかった箇所も、心の微妙な動きを反映しているのが分かった。サククスのように奏者の息づかいが、そのまま演奏に反映する楽器では、その日の乗りの良さが曲に大きく作用する。《ランドスケープ》≒ においては、前期ペッパーの美しいばかりの音とは違い、うるおいのある奥深さと苦みの効いた大人の味になっている。

そこで、後期ペッパーのアルバムを聴き直したくなった。ライブに関しては、《東京デビュー》≒ Tokyo Debut (1977) の mp3 版を持っているが、圧縮音源のせいで再生された音に力がないのと、好調なペッパーに対して、オルガンの演奏が酷すぎる。曲によっては、和音の鍵盤を押しているだけの体たらくある。とはいえ、自伝『ストレート・ライフ』Straight Life では、そ

の時の日本人の歓迎ぶりがアート・ペッパーに再起の喜びを感じさせた様子が、熱っぽい調子で語られている。

東京で行われたライブでも、≪ランドスケープ≫は後期ペッパーの面目躍如たる名演奏である。1曲目の「ザ・ブルース」True Blues や2曲目の「サムタイム」Sometime は淡々と吹いているが、3曲目の「ランドスケープ」Landscape から大いに乗ってくる。4曲目の「アヴァロン」Avalon に関しては、以前ソニー・ステイット Sonny Stitt の演奏をよく聴いたが、感情のこめ方はアート・ペッパーの方が味がある。明るさと安らぎを感じさせる演奏である。

5曲目の「虹の彼方に」Over The Rainbow は、ニュージカル映画『オズの魔法使い』の主題歌として知られている。≪マ

ーティ・ペイチ・カルテット・フィーチャリング・アート・ペッパー≫The Marty Paich Quartet Featuring Art Pepper に含まれた「虹の彼方に」も、演奏の美しさで評価されているが、≪ランドスケープ≫所収の方が美しさと味わいでは数段上である。

6曲目の「ストレート・ライフ」Straight Life はアート・ペッパーの代表作で、≪アート・ペッパー・ミーツ・ザ・リズム・セクション≫Art Pepper Meets The Rhythm Section 所収の演奏に劣らず、前期ペッパーの演奏を彷彿させる迫力と美しさがあり、さらにそれを超えた自由な精神が広がる。7曲目の「マンボ・デ・ラ・ピンタ」Mambo De La Pinta はラテン系の乗りで、このアルバムの中では異色だが、演奏の調子は最高である。このように≪ランドスケープ≫は、ピアノのジョージ・ケイブル

ズ George Cables の華麗な演奏と相まって、後期ペッパーのアルバムの中では、屈指の名盤となっている。

Art Pepper 《Straight Life》

ジャズ・アルト・サクソス奏者として、アート・ペッパー Art Pepper は死後三十年以上経つ現在でも、日本での人気は衰えていない。前期の代表的なアルバムには、《サーフ・ライド》《Surf Ride》《モダン・アート》《Modern Art》《アート・ペッパー・ミーツ・ザ・リズム・セクション》《Art Pepper Meets the Rhythm Section》が挙げられる。繊細な感性和美しい音色によるアドリブが、日本人の心を魅了してやまない。ヘロイン中毒で入獄と出獄を繰り返し、一九七〇年代半ばに復活して以降が後期に位置づけられるが、サクソスの音色はすっかり変わり、怒りと悲しみに引き裂かれた、突き刺さるような演奏になった。

後期の代表的アルバムとしては、《ザ・コンプリート・ビレッジ・バンガード・セッションズ》The Complete Village Vanguard Sessions や《ストレート・ライフ》Straight Life がある。今、ここで紹介しようとしているのは、アルバムではなく自伝の方である。

同書は三番目の妻、ローリーがアート・ペッパーの録音を原稿に起こし、知人のインタビュアーや雑誌の記事などから収集したもので構成されている。本人の告白と様々な人物から見たアート・ペッパーの姿が**つづら**れている。複数の視点から多角的に描かれていることで、アート・サククス奏者の全体像が浮かび上がる。妻のローリーは才女であり、彼の音楽の批評家であるとともに、事務的処理能力にも長けていた。アート・ペッパ

ーの真実が残されたのも、ローリーという女性を得たおかげである。後期ペッパーの活躍も、ローリーとの出会いなくしてはなかつただろう。

この自伝を読むことによって、アート・ペッパーの人生と音楽との関係も明らかになる。前期ペッパーの美しさは、ヘロインに溺れて人生を滅茶苦茶にしまった弱さにつながっている。後期ペッパーの荒削りの力強さは、地獄を見てきた人間の自信の上に成り立っている。《ジャズ・サヴァイヴァー》Notes From A Jazz Survivor と「うどキュメンタリー」のDVDを先に見ておくと、この自伝の面白さがつかみやすい。とにかく、読み進めるのが楽しいし、彼の音楽への理解を深めさせてくれる。自伝文学としても一級の価値を持つと思う。このような名作の

翻訳が、長らく絶版のままになっているのはおかしい。死後に増補された部分を含めた、一日も早い再版が望まれる。

Art Pepper 《Notes From A Jazz Survivor》

アート・ペッパー Art Pepper には『ストレート・ライフ』
Straight Life という自伝があるが、生前の姿を映したドキュメンタリービデオ、《ジャズ・サヴァイヴァー》《Notes From A Jazz Survivor》の印象も強烈である。若い頃の端正な面持ちと繊細な演奏は、日本で好まれる理由の一つであるが、音程が多少ずれても気にしない、後期の力強い演奏が生まれたわけを、晩年を映したビデオはよく語っていた。

アート・ペッパーは一九二五年、母が十五歳の時に生まれた。本名はアーサー・エドワード・ペッパー・ジュニア Arthur Edward Pepper, Jr. である。不本意な妊娠であり、遊びたい盛

りに生まれてしまった子なので、放っておかれて家の外でお腹を空かせ、寂しく惨めな思いをしたという。

デビューしてしばらくした後、隣にいた男が麻薬をやっていた。それをやれば地獄に墮ちると知っていたのに、鼻から吸ってしまった。鏡を見ると瞳孔が小さくなっていく。それはそれは美しい世界だった。牧草地で日向ぼっこしているようで、すべての憂いも吹き飛んでしまう。稼いだ金もすべて、ヘロインにつき込んでしまった。金が入るとこれでまた打てると考えた。仲間の一人が警察に密告し、アット・ペツパーは逮捕される。一年以上演奏ができなかったのは、音楽が命だった彼にとってはまさしく地獄だった。仕事がなくなると、かっぱらいや強盗の手引きなど、次々と犯罪に手を染めていった……。

アット・ペツパーは最後の妻、ローリーと出会ったことで、麻薬から手を引くことができた。体はがたがた、アル中のように視線は焦点が定まらず、呂律が回らないような話し方をする。以前のような繊細な演奏はできなくなった。でも彼は、昔より演奏がうまくなった、俺は天才だと豪語する。ジャズ仲間のピアニストの話をしているとき、あいつは演奏が気に入らなければ、ピアノを壊そうとするだろうが、力がないからできない、手榴弾でピアノを爆破するだろうなどと言っていた。飛躍する話のテンポは、ジャンキーっぽい感じがした。

最初の妻パティが、娘パトリシアを連れて刑務所にやってきた。それは父親がけだものであることを確認させ、二度と会わ

せないようにするためだった。娘が三十代になったとき、一度電話をかけたことがあった。パトリシアは一方的に朗読するだけで、最後に父親に対して「レイプ魔」と言った。娘のこの言葉が、アート・ペッパの心を一番傷つけた。やるせない思いをぶつけるからこそ、後期ペッパの泣き叫ぶような力強い響きが出てくるのだろう。

ちなみに、晩年のアルバムに《アート・ペッパ・トゥデイ》Art Pepper Today というのがある。後期ペッパの中で、最も重要な作品の一つだと思う。その中に娘の名前をつけた「パトリシア」Patricia と、「ジーズ・フリーリッシュ・シングス」These Foolish Things が収録されている。後期ペッパになじめない方でも、これらの演奏を聴くことで、前期にはなかった悲しみ

と怒りが、いかにサクスの響きに込められているか聴き取れるだろう。

John Coltrane & Art Pepper

テナー・サクソ奏者のジョン・コルトレーン John Coltrane は、自己主張の強い音を出す。一つ一つの音は穴をうがつよう
に鋭いが、うねるようなメロディーを生み出している。《至上
の愛》A Love Supreme は最高傑作とされているが、僕はまだ
鑑賞できるまで理解が深まっていない。コルトレーンの晩年と
いっても、四十過ぎで亡くなっているのだが、晩年のフリー・
ジャズの曲は、絶叫に近い演奏が延々と続くから、聴き慣れて
いないと拒絶反応が出るだろう。

コルトレーンのアルバムはいろいろ聴いたが、全体のバラ
ンスがよく、耳に快いのは、スタンダードが集められた《スター
ダスト》Stardust や 《ラッシュ・ライフ》Lush Life、《スタン
ダード・コルトレーン》Standard Coltrane、それに 《ジョン・コ
ルトレーン・アンド・ジョニー・ハートマン》John Coltrane &
Johnny Hartman などだろう。もちろん、これ以外のアルバムで
も、素晴らしい演奏をしている曲は多いのだが。

コルトレーンといえば、アルト・サクソ奏者のアート・ペ
ッパー Art Pepper も、コルトレーンの影響を受けている。コ
ルトレーンが一九二六年の生まれで、アート・ペッパーが一九二
五年だから、アート・ペッパーの方が年上なのだが。日本でも
人気が高いけれども、好んで聴かれるのは前期ペッパーだろう。
《サーフ・ライド》Surf Ride、《アート・ペッパー・カルテッ

ト》The Art Pepper Quartet` 《モダン・アート》Modern Art` 《アート・ペッパー・シート・ザ・リズム・セクション》Art Pepper Meets the Rhythm Section あたりが、美しいアドリブを展開している。全米では一時、チャーリー・パーカー Charlie Parker に次いで人気が高いアルト・サクソ奏者だっただけに、一点の曇りもない澄んだメロディーに、時の流れを忘れさせられた人も多いだろう。

麻薬中毒に陥って、刑務所を何度も出たり入ったりしているうちに、前期の美しい音色は消えていった。その最後を飾る《インテンシティ》Intensity には、すでにサクソスの音に変化が出ていて、一つ一つの音の刺激が強い。コルトレーンの演奏を聴きながら練習を積んでいくうちに、わざと耳障りのするきつい

音を出すようになっていく。コルトレーンの場合は、うなる音が自然なのだが、アート・ペッパーの場合、模倣と試行錯誤の過程だったので、不快に聞こえてしまうことが多い。

後期の復活を遂げた後は、力強さと荒削りの演奏を自分の物にして、怒りと悲しみを前面に出した世界を築き上げた。僕自身が特に好きなアルバムは、《アート・ペッパー・トゥデイ》Art Pepper Today で、苦みの中に美しさがある。父の存在を否定する実の娘への思いが伝わる「パトリア」Patricia と、麻薬で人生を滅茶苦茶にしまったことへの悔恨が、若き日への懐かしさの中で癒される「ジーズ・フリーリッシュ・シングス」These Foolish Things が、とりわけ心を打つ。

John Coltrane 《Ballads》

バラードは元来、中世に吟遊詩人ぎんゆうによって謡われた叙事詩を表していたが、伝説を語る物語詩や、自由な形式の楽曲、さらには感傷的なポピュラー・ソングまでも指すようになった。クラシック音楽のシヨパンにも、バラードはあるけれども、ここではジャズに限って触れることにする。

ジョン・コルトレーン John Coltrane と言えば、激しい絶叫するようなサククスという印象が強いが、心温まるメロディーを、リラククスして吹いている《バラード》は、バランスと調和を求める日本人好みのアルバムと言える。ただし、甘さと苦さ、それに酸味が加わり、決して退屈させられるような内容で

はない。

甘えるような響きの「セイ・イット」 Say It (Over and Over Again) に始まり、苦悩に浸ってやや苦い「ユー・ドント・ノウ」
・ホワット・ラヴ・イズ」 You Don't Know What Love Is、青春の純真な思いをノスタルジックに表現した「トウー・ヤング
・トウ・ゴー・ステディ」 Too Young to Go Steady、妥協を知らない鋭さを感じさせる「オール・オア・ナッシング・アット
・オール」 All or Nothing at All を経て、ひたむきさを前面に打ち出した「アイ・ウィッシュユ・アイ・ニュー」 I Wish I Knew、
クールになろうとしてなりきれない「ホワッツ・ニュー」
What's New?、懐かしさに癒される「イツ・イージー・トウ
・リメンバー」 It's Easy to Remember、もの悲しさを漂わせな

がら、楽しかった思い出に浸る「ナンシー」 Nancy (With the Laughing Face)で終わる。

ここで述べたコメントは、あくまでも僕自身の印象に過ぎない。現実のコレクトレーンは、楽譜を買って仲間と話し合い、アレンジした点を確認して、すぐに録音してしまったという。さりと生まれたところが、名盤たる由縁ゆえんなのかもしれない。絵画で諭たとえるなら、さしずめ水墨画といったところだろう。

関心を持たれた方は、ぜひ自身の耳で確かめていただきたい。その際に気をつけなければならないのは、《バラード》には二種類の版があるということである。一般に流布しているものでも悪くはないが、デラックス・エディションの方は、保存状態が非常に良いマスターテープからデジタル化されており、微妙

な息づかいまで録音されている。二枚組になっているが、もっぱら聴いているのは、普及している版と同じ曲が収められた1枚目である。

《The World According To John Coltrane》

《ジョン・コルトレーンの世界》The World According To John Coltrane という DVD を見た。コルトレーンの父は牧師だったが、ジョンが幼い時に亡くなり、母の強い影響を受けていた。黒人の集まる教会では、祈りの中で恍惚となり、人々の心が一つになる体験をした。これが晩年にフリー・ジャズに展開することになる。

セロニアス・モンク Thelonious Monk の楽団で演奏している頃は、神業のようなモンクの演奏の下で、個性を発揮することはできなかった。コルトレーンが実力を示すようになったのは、マイルス・デイビス Miles Davis のモード演奏に感化されてか

らだという。独特の浮遊感のある自由な演奏が可能になった。

日本で人気がある《バラード》Ballads などは、コルトレーンの音楽としては余技よぎに近いもので、執拗しじょうに主旋律を繰り返した《マイ・フェイバリット・シングス》My Favorite Things などに、コルトレーンの心髄を見出すべきなのだろう。ちなみに、僕が好きなバージョンは、《ライブ・イン・ストックホルム》1961《Live in Stockholm 1961》所収の演奏で、限界に達するまで突き詰めて、旋回しながら高みを目指すコルトレーンの演奏に、エリック・ドルフィー Eric Dolphy の超絶したフルートの音空間がコントラストをなしており、モノトーンになりがちなコルトレーンの演奏を、奥行き深いものになっている。

あの執拗なまでの音の探究は、ともすると饒舌じょうぜつ過ぎると批

判されたりするが、コルトレーンがインドやイスラムの音楽を研究して、そこからエッセンスを学んだ成果であるという。コルトレーンはアフリカの音楽や、日本の琴や尺八にも深い関心を示したらしい。それがジャズという枠組みを超えて、最晩年のフリー・ジャズへと突き進む原動力となったのだろう。

死ぬ前年の演奏を見てみると、もう全身の力を出し切って、命を使い果たそうとしていると感じた。今の演奏にすべてを注ぎ込んでしまったら、もう明日は自分が残るか分からない。それは教会で身についた魂の表現が、最終的な形として発展した姿なのだろう。サックスによる祈りを理解するには、聴く人間も精神的な探究を求められるのである。

Sonny Criss 《Out of Nowhere》

ビーバップ Bebop というジャズの即興演奏のスタイルに、僕が最初に触れたのは、ソニー・ステイット Sonny Stitt だった。そこから師のチャーリー・パーカー Charlie Parker に惹かれていった。ステイットはパーカーを模倣していると言われて、パーカーの生前はアルトからテナーに、演奏するサックスを変更していたほどである。たしかに、ステイットのアルトの音は、パーカーのものと酷似している。

僕がソニー・クリス Sonny Criss の演奏を聴いたとき、凄まじい速さで演奏する技術は、パーカーと共通すると感じたが、アルト・サックスの音は、かなり違っているのに気づいた。僕

自身の好みを言えば、パーカーやステイットの太い音が快いのだが、クリスの場合は女性の叫び声に似ている。嘆き節と称されているのも納得できる。ちよつとモノトーンでどの曲を聴いても、同じ調子で吹いている。五十歳のとき、胃癌の病苦のために自殺した悲劇が、イメージとして重なってしまう。純粹だけど不器用なのか。悲劇的な死に方しているから、それもあって、かえって惹かれてしまうのかもしれない。

ソニー・クリスの《ゴー・マン！》Go Man!などは、バランスが取れた構成で、初めてクリスに触れる人にはオススメである。「ハウ・ハイ・ザ・ムーン」How High the Moon はパーカーが「オーニソロジー」Ornithology にアレンジした原曲で、ちよつと聴いていると区別がつかないぐらい、最初の部分はそ

っくりである。「アフター・ユーズ・ゴーン」After You've Gone や「イフ・アイ・ハッド・ユー」If I Had You は、ステイットの《ハード・スウィング》The Hard Swing の華麗なほどの伸びやかさと、クリスの悲哀を帯びた絶唱を比べてみるといい。クリスの魅力が詰まった《ゴー・マン！》だが、音質の方はそこそこである。同じアルバムが曲の順番が入れ替わり、リマスターされたのが《ブルース・フォー・ローズ》Blues for Rose である。こちらの方が音質がいい。ステイットと比べてもマイナーな奏者なので、リマスターされたアルバムが聴きたくても、あまり多くはない。

ここで紹介するのは、《アウト・オブ・ノーフェア》Out of

Nowhere というアルバムである。収録されたのは死の前年（一九七六）である。クリスのサククスばかりでなく、ピアノやベース、ドラムも鮮明によみがえり、音の空間が見事に再現されている。晩年のパーカーも演奏した「オール・ザ・シングス・ユー・アー」「All The Things You Are」や「アウト・オブ・ノーフェア」「Out of Nowhere」ジョン・コルトレーン John Coltrane やケニー・ドーハム Kenny Dorham も演奏した「マイ・アイデア」My Ideal など全7曲入っている。

クリスの演奏はどれも一本気で、純粹なだけにやや単調なところもあるのだが、自分の魂をすべてサククスに込めているところは、永遠の若さを保ち続けているとも言える。

Jackie McLean 《Swing, Swang, Swingin'》

ギタリストの息子として生まれ、セロニアス・モンク Thelonious Monk やバド・パウエル Bud Powell、チャーリー・パーカー Charlie Parker の指導を受けたジャッキー・マクリーン Jackie McLean は、ハード・バップ Hard Bop のアルト・サクソニストとして登場した。後に、フリー・ジャズ Free Jazz へ傾倒していくのだが、初期のアルバム《スウィング・スワング・スイングン》Swing, Swang, Swingin' は、パーカーらビーバップ Bebop の即興演奏を継承している。

ここでのマクリーンは一本気で、パーカー張りの即興演奏を、スウィング swing しまくっている。乗りに乗ると体がリズムミカ

ルに動き出す。1曲目の「ホワッツ・ニュー」What's New?はグレーな響きで始まり、2曲目の「レッツ・フェイス・ザ・ミュージック・アンド・ダンス」Let's Face The Music And Danceも基調はメランコリックだが、得意のスウィングが勢いを増していく。3曲目の「ステーブル・メイツ」Stable Matesから曲調に明るさがきざす。

僕が特に好きなのは、4曲目の「アイ・リメンバー・ユー」I Remember Youと5曲目の「アイ・ラヴ・ユー」I Love Youである。前者はパーカーのアルバム、≪ナウズ・ザ・タイム≫Now's The Time に収められた名曲。3分余りのパーカーの演奏に比べ、マクリーンの場合は5分余り。その分、刺激の強いサックスに圧倒される。自信に満ちた響きは、パーカーが乗り移った

かのような、目にも留まらぬ音の急激な変化に見られる。後者はアート・ペッパー Art Pepper の ≪インテンシティ≫ Intensity の演奏でよく聴いた。アイロニカルな苦みの効いたペッパーに対し、マクリーンの方は、陽気なお祭り気分が途中から、お得意のハード・バップ風に転調する。

それぞれの曲は違うのに、似たり寄ったりの味付けではと思うのだが、乗りまくった人間にとっては、高揚した感覚こそが重要なのだ。ルディ・ヴァン・ゲルダー (RVG) の録音はマクリーンの洗いサックスを、微少な音の変化までとらえ、時が経つのを忘れさせる名盤にしている。

Stan Getz & Kenny Barron 《People Time》

ジャズ・ミュージシャンで、長生きする演奏家も増えてきたが、演奏能力を生涯維持するのは難しい。一度確立したスタイルを続けていると、マンネリズムに陥ってしまう。アドリブが命のジャズにあつては、乗りの良さが演奏の質を左右する。したがって、高さを維持するためには、常に挑戦していく態度が必要であり、それがアーティストとしての質を向上させていくのである。

ジャズは黒人のものが本物だという意見があり、確かに優れたジャズ・ミュージシャンの多くが黒人なのだが、スタン・ゲッツ Stan Getz はそうした中で、数少ない優れた白人のジャズ

・ミュージシャンなのである。

スタン・ゲッツもご多分に洩れず、若い頃に麻薬中毒になり、強盗未遂事件で逮捕されている。テナー・サククス奏者として十代から才覚を現し、抒情的な美しい音を出すことで注目を浴びた。スタン・ゲッツといえば、ボサノバだと言う人も多いだろう。ジョアン・ジルベルト João Gilberto、アントニオ・カルロス・ジヨビン Antônio Carlos Jobim との共演、《ゲッツ／ジルベルト》Getz/Gilberto は不朽の名盤である。スタン・ゲッツで一枚勧めるとしたら、このアルバムを挙げる人が多いだろう。

スタン・ゲッツの素晴らしさは、そこで止まらなかった点にある。ビル・エヴァンス Bill Evans との共演、《バット・ビュートイフル》But Beautiful や、晩年の《旅》Voyage、《アニバ

ーサリー」《Anniversary》《セレニティー》《Serenity》など、精神的に名盤を生み出している。肝臓癌にかかり、闘病生活を続けながら最後のアルバムとなったのが、この《ピープル・タイム》《People Time》である。

演奏にはいささかも衰えが見られない。むしろ。年齢を重ねるにつれ、音に深みが増して、魂の奥の思いから、揺れ動く心の機微まで、余すことなく表現している。吹き終わると、実は息苦しそうにしていたという。しかし、演奏を聴く限りは、全く隙を見せていない。克己的な意志の強さを感じる。《ピープル・タイム》で特に好きなのは、「イースト・オブ・ザ・サン アンド ウェスト・オブ・ザ・ムーン」《East Of The Sun And West Of The Moon》、「夜も昼も」《Night And Day》である。前

者はチャーリー・パーカー Charlie Parker が多く演奏し、後者はコール・ポーター Cole Porter の曲として有名だが、スタン・ゲッツの演奏ほどすばらしいものは聴いたことがない。

このアルバムの魅力をさらに高めているのが、ピアニストのケニー・バロン Kenny Barron である。晩年のスタン・ゲッツと共演し、ビーバップ Bebop の系譜に連なる見事な即興演奏と、人の心をとらえて放さない流麗なタッチが魅力的なピアニストである。

Kenny Barron 《Confirmation》

ビーバップ Bebop の系統に属するジャズ・ピアニスト、ケニー・バロン Kenny Barron の演奏を初めて聴いたのは、スタン・ゲッツ Stan Getz と共演したアルバム《ピープル・タイム》People Time においてだった。

ここで紹介するのは、ライブ録音のアルバム《コンファメーション》Confirmation である。冒頭の曲でもある。作曲したのはチャーリー・パーカー Charlie Parker。このアルバムは、ケニー・バロンの個性が、最もよく表された作品である。

ピアノなどの鍵盤楽器は、サククスなどの管楽器が演奏されると、伴奏の役目に回ってしまう。これは僕の印象に過ぎない

のだが、ジャズで共演する際の、楽器同士のヒエラルキーは、①管楽器②鍵盤楽器③弦楽器④打楽器の順ではないか。ケニー・バロンのこのライブに、管楽器が含まれていないのも、ピアニストが個性を発揮するには、管楽器に主役の座を奪われてはならないからである。

冒頭の「コンファメーション」からバロンは絶好調である。弾くようなリズムミカルな調子で、パーカーの流麗なメロディーを、ビーバップ本来の軽妙さにアレンジして見せる。

2曲目は「オン・グリーン・ドルフィン・ストリート」On Gren Dolphin Street である。ドラムとシンバルの軽快な伴奏に、バロンの陽気で力強いピアノが、高揚した音空間を作り上げて

いる。3曲目の「テンダーリー」Tenderly は一転して、バロンの繊細で柔らかなタッチが、揺れ動く心の襜ひだを優しく撫なでる。4曲目の「君を抱いて」Embraceable You はさらに、優しさの上に光のイメージを添える。ピアノの一音一音の響きを大切に、ゆるやかに流れる大河の余裕を感じさせる。

5曲目の「神の子はみな踊る」All Gods Chillun' Got Rhythm は「ソニー・ステイット・バド・パウエル&J. J. ジョンソン」
Sonny Stitt, Bud Powell & J. J. Johnson の冒頭で演奏された曲だが、バロンのリズミカルな演奏は、ピアノの音の美しさを際立たせた華麗なものとなっている。6曲目の「身も心も」Body & Soul は、ドラムやシンバルは控え目に、憂いを帯びた甘美さに浸らせる魔術に、聴く者は身も心もとらわれてしまう。

7曲目の「イースト オブ ザ サン」East Of The Sun はかつて、《ピープル・タイム》でスタン・ゲッツと共演したことがある曲。死を直前に控えたゲッツの魂こもるサククスに合わせ、控えめながら自身の技能を出し尽くし、華々しい即興演奏で飾った。青春の輝きを謳歌おウカする中で、突然命を絶たれた作曲家ブルックス・ボウマン Brooks Bowman と、死と格闘するゲッツの姿が二重写しになる演奏だった。

このアルバムではバロンが主役である。夭折ようせつした作曲者の短い生涯を、悲しみをこらえて、希望をあくまでも持ち続けようと、陽気なメロディーに歌い上げている。明るさの中に陰影がこもっている点で、実に味わいが深い。観客が繰り返し拍手する点から見ても、このアルバムで最も素晴らしい演奏である。

8曲目の「オレオ」Oleo は、マイルス・デイビス Miles Davis のトランペットで聴かれた方が多いのではないか。バロンは1曲目と同様に、ビーバップ本来の、神業としか思えない、すさまじいまでの速さでピアノを演奏する。ドラムとシンバルの力強さが、背後からバロンを支えている。

最後の曲「ナシメント」Nascimento は、もう会場全体がお祭り気分である。会場の人々は、手拍子に掛け声で、恐らく一部は踊り出しているのだろう。これほどの熱気をかき立てたのも、スタンダード曲ばかり取り上げたからというより、雰囲気醸し出す天才のピアノに、人々が酔いしれたからである。演奏者の面々の名前が挙げられるたびに歓声が上がリ、最後に New York という叫びとともに、興奮した空間は閉じられる。

Kenny Barron & John Hicks Quartet 《Rhythm-A-Ning》

スタジオ録音とライブの違いは何だろうか。チャーリー・パーカー Charlie Parker の時代には、78回転レコードで、約3分という時間制限があったので、スタジオ録音は一寸の隙もない緊張感をとまなう反面、羽目を外す余裕もなかった。一方、ライブは音質の悪い私的な録音が残っており、時間にとらわれない分、自由な演奏が可能となった。パーカーの「オーニソロジー」Ornithology や「スクラップル・フロム・ジ・アップル」Scapple From The Apple を、スタジオ録音とライブで聴き比べると、限界へ向かってイメージを広げていくライブの闊達な即興演奏に、パーカーの真髄しんずいを見る思いがするだろう。

ビーバップ Bebop のピアニストとして、現在も活躍するケニー・バロン Kenny Baron の場合も、スタジオ録音とライブでは大きな印象の差を伴う。卓越した演奏技術を持つことで、スタジオにおいては、完成された様式美に留まりかねない。個性の強さが抑制されてしまうのである。それに対して、ライブでは聴衆の反応が、ピアニスト自身の精神を鼓舞して、神業のような万華鏡の音の世界を繰り広げる。

ケニー・バロンのライブで最も好きなのは ≪コンファーマーメーション≫ Confirmation だが、ここで紹介する ≪リズムマニング≫ Rhythm-A-Ning は、1曲の長さが15分近い物が多く、その分目くるめくような音の洪水の中を、法悦に近いところまで導かれていく。この素晴らしいライブは、バロンの作曲した「サンシ

ヤワー」Sunshower や共演のピアニスト、ジョン・ヒックス John Hicks の作曲した「ナイマのラブソング」Naima's Love Song、 「アフター・ザ・モーニング」After The Morning、それにセロニアス・モンク Thelonious Monk の作曲した「ブルー・モンク」Blue Monk、 「リズムマニング」Rhythm-A-Ning などで構成されている。

Charlie Haden & Kenny Barron 《Night And The City》

ジャズの中で即興演奏を行うビーバップ *Bebop* が、僕がいちばん好きなジャンルだ。これはサククスに限らず、ピアノに關しても言えることである。ビーバップのピアニストといえ、まず、バド・パウエル *Bud Powell* が挙げられる。神業のような演奏には舌を巻くばかりだが、《バド・パウエルのムーズ》*Bud Powell's Moods* のように、魔法のような磁力を帯びた、夜の美しさを表現した異色のアルバムもある。ゆったりしたタッチが夢幻境に誘うのである。

ビーバップのピアニストの系譜に位置づけられるケニー・バロン *Kenny Barron* に関しては、スタジオで録音したアルバム

は、何かお決まりの名演奏といった感じである。ライブで聴衆を前にした演奏だと、会場の雰囲気鼓舞されて、味わい深い演奏をするのである。ケニー・バロンの《コンファメーション》*Confirmation* が最も好きなアルバムで、ビーバップのピアニストとして面目躍如と言える演奏をしている。会場の盛り上がりも素晴らしく、CDで聴いていても聴衆の興奮が伝わってくる。

ケニー・バロンにも、《バド・パウエルのムーズ》に匹敵するような夜のアルバムがある。ジャケットに描かれた都市の夜景が、雰囲気をつたり表現している。それが《ナイト・イン・ザ・シティ》*Night And The City* である。《コンファメーション》の雰囲気とは全く異なる。魂を深みへと沈静させる効果がある。その変容ぶりに驚かされる。

夜景の美しいレストランや、夜空から浮かび上がる超高層ビルが眺められるホテルの一室で、好きな人と演奏に聴き入っている雰囲気がある。夜は人々にとつて等しく訪れる休息の時である。忙しく働いている人も、しばしすべてから解放されて、心温まる安らぎを求める。これは眠りに入る前だからで、目覚めていても、心の一部は夢想の世界にさまよい出ようとしている。

「たそがれの歌」Twilight Songの短調風の演奏、「お願いだから」For Heaven's Sakeの哀願するような調べ、「身も心も」Body And Soulや「ユー・ドント・ノウ・ホワット・ラヴ・イズ」

You Don't Know What Love Isの身を引き裂かれるようなメロディーも、追想のようなヴェールに包まれており、つらさや悲しみまでも心を癒す音色と化している。「ワルツ・フォー・リユート」Waltz For Ruthや「君を想うばかり」The Very Thought Of Youの甘い夢想も、夜だからこそ許される。

これは一体どうしたことだろうか。原曲のリズムを変調させて、どの曲もゆったりとした均一の調子で演奏されている。胎児が母体で聴く鼓動に安らぎを感じるような響きがある。それこそケニー・バロンのピアノの背後で響き続けるチャールリー・ヘイデン Charlie Hadenの低音のベースのなせる技である。ピアノとベースが渾然こんぜん一体となった演奏に聴き入るうちに、人々の心は現実から解放されて、夜の闇の中に沈んでいく。

The Great Jazz Trio 《The Legend of Jazz Live at Blue Note Tokyo》

高田馬場駅前のレコード店が閉店することになり、在庫の商品を半額で売り尽くしていた。ジャズ・コーナーに行ってみると、ハンク・ジョーンズ Hank Jones 率いるグレート・ジャズ・トリオ The Great Jazz Trio が、東京で開催したライブを収録した Blu-ray Disc が目に入った。

二〇〇九年にハンク・ジョーンズが来日したとき、ライブ情報を見てチケットを買いおろすか悩んでいた。そのときためらったのがいけなかった。翌二〇一〇年には亡くなったのだから、生前のハンク・ジョーンズの生演奏は、ついに聴けずじまいにな

ってしまった。

その後、Blu-ray Disc の《ザ・レジェンド・オブ・ジャズ・ライブ・アット・ブルー・ノート・東京》The Legend of Jazz Live at Blue Note Tokyo を何度か店で見かけたが、当時は Blu-ray player もなく、六六一五円という定価も買う気をそいだ。半値で売られていたことから、ようやく入手するに至り、演奏の場面を目にすることができたのである。

収録されているのは、二〇〇六年の三月五日と二月十一日の、ブルー・ノート・東京でのライブである。前者はザ・グレート・ジャズ・トリオ The Great Jazz Trio の演奏で、ピアノはハンク・ジョーンズ、ベースはデヴィッド・フィンク David Finck、ドラムはジェローム・ジェニングス Jerome Jennings である。

「A列車に乗ろう」Take the "A"Trainに始まり、「いつか王子さまが」Someday My Prince Will Come、「ラウンド・ミッドナイト」Round Midnightなど、ジャズのスタンダード曲の演奏が続く。ハンク・ジョーンズの演奏は、気品にあふれたもので、熱狂的なジャズ・ファンには物足りないかもしれないが、聴いていて耳に快いものばかりである。

ジャズが全盛の頃、チャリー・パーカーCharlie Parker、デイジー・ガレスピーDizzy Gillespie、マイルス・デイビスMiles Davisらと共演しており、ジャズ創生期を知る生き残りとして、九十過ぎの超高齢まで現役のピアニストだった。「ひょうきんなお爺ちゃん」といった感じで、演奏が終わると、「やったぜ！」と言わんばかりのポーズを取ったり、自分の名前を

わざと、「反抗ジョーンズ」と言ってみたり、「ありがとうございまして」と日本語で挨拶するなど、サービスピ精神にも富んでいた。

後半に収録されているのは、ハンク・ジョーンズによるソロ・ピアノの演奏である。前半と比較して、おとなしめの静かな曲が多い。「サマー・タイム」Somertime、「柳よ泣いておくれ」Willow Weep for Me、「黒いオルフェ」Black Orpheusなどのスタンダード曲を、繊細なタッチで弾いていく。「スピーク・ロウ」Speak Lowでは、ひそひそ声をピアノで表現しようとして、あえて聞こえないほどかすかな音にするなど、持ち前の茶目っ気で笑いを得ていた。

ただ、指の動きが壮年期の演奏ほど自在ではないようで、複雑な箇所になると、若干指のスピードが遅くなる。間違えないように動かしているからだと思うが、NHKの「のど自慢」に登場するお爺ちゃんみたいに、曲の進行が速くなったり遅くなったりする。九十歳になろうという年で、これだけの演奏ができるのは素晴らしいことなのだが。

僕が特に興味深く感じたのは、ボーナスとして収録されたインタビューだった。ハンク・ジョーンズがピアニストの道に進んだのは、母親の希望でもあったという。演奏にとつて重要なのは曲に対する理解であり、瞬間の集中力である。セロニアス・モンク Thelonious Monk の自宅に呼ばれて写譜をしたことや、アート・テイタム Art Tatum を敬愛していたこと、ピアニ

スト以外ではチャーリー・パーカー Charlie Parker の演奏をよく聴いたことなどを語っていた。

最後に Blu-ray について述べると、とにかく映像が細かいところまで鮮明で、スーツや指や鍵盤がくつきり見える。音の輪郭はそれ以上に鮮やかで、高音から低音まで体に響いてくるようである。僕の場合、ステレオの96kヘルツ・24ビットの音を、自宅のバーチャル・サラウンドで聴いた。5.0チャンネルのサラウンドの場合、48kヘルツ・16ビットで再生される。

Fusion of Jazz and Classical music?

フュージョンというと、ジャズとロックを融合したポピュラー音楽という印象が強い。フュージョン自体は、異なるジャンルの音楽の融合だから、相手がソウルでもラテンでもいいわけだが。

クラシック音楽をジャズ化したものは、ありふれているけれども、ジャズのスタンダード曲を、クラシック音楽みたいに弾く奏者がいるのは最近知った。その人物の写真を見ると、パンチパーマのあんちゃんみたいで、クラシック音楽のアルバムも出す一方、バド・パウエル Bud Powell みたいに、ピアノを弾きながら鼻歌をうたう。

キース・ジャレット Keith Jarrett を知ったのは、iTunes Store で売っていた小川隆夫氏の『名盤のウラに記された真実』という電子書籍で紹介されていたからである。ここでは詳しく述べないけれども、その本には仕掛けがあって、LP のジャケットの写真に触れると、本物の裏側に記されている曲のリストなどが現れる。また iTunes Store などへのリンクも張ってある。

さて、キース・ジャレットについてだが、一九四五年にアメリカのペンシルベニア州で生まれ、幼少からクラシックのピアノ曲を弾いていた。ジャズの世界に踏み込んだのは高校からで、二十代の半ばからは、マイルス・デイビス Miles Davis のバンドに参加していたという。

僕はまだそれほどの枚数は聴いていないが、古典的なジャズ

のスタイルにとらわれていないといった印象である。どんな芸術であつても、ひとたび形式が確立されてしまうと、それに追従しようという人が多くなる。一般のファンに理解してもらいやすく、興行的にも危険を冒さずに済む。だから、キース・ジャレットのCDを初めて聴いたとき、「あれっ、これってジャズ？」って感じだった。

ここでは、僕が最初に触れたアルバム《スタンダード・ライブ》Standards Liveを紹介しよう。冒頭は「星影のステラ」Stella By Starlightだが、いきなり聴かされると、何の曲だか分からないだろう。ショパンの夜想曲か何かみたいである。途中から有名なメロディーが聞こえてくる。ジャズらしいビートも効い

ている。時折流れてくるのは、バド・パウエルBud Powellの鼻歌が可愛く思えるくらいの、小猫の叫びみたいなジャレットの鼻歌である。神経質な人なら気になってしまうかもしれない。感傷的なイメージから脱皮した、全く新しい「星影のステラ」の誕生である。続く「おかしなブルース」The Wrong Bluesでは、一転して最初からジャズらしいムードに浸れる。聴きやすくても安易に流れず、気品が感じられるタッチである。

3曲目は「恋に恋して」Falling In Love With Loveで、聴き出してすぐに曲名が分かるが、途中からはもうジャレットの世界である。リズムはジャズでも、テーマに囚とらわれぬ現代音楽を聴かされている感じである。4曲目の「トゥー・ヤング・トゥ・ゴー・ステディ」Too Young To Go Steadyは静せいひん謐な世界で

ある。ジョン・コルトレーン John Coltrane のひたむきな演奏とは違い、心乱されることなく淡々と弾き続けている。

5曲目は「今宵の君は」The Way You Look Tonight で、3曲目同様に、最初はアレンジが少ないのだが、たちまち音の魔法にかげられ、知らない音の世界にさらわれてしまう。ジャズのビートはかなり効いている。乗りの良さでは随一なのは、聴衆の反応の良さからも分かる。

6曲目は「オールド・カントリー」The Old Country で、陰影のある上品なタッチである。終曲として大人しい感じの演奏である。ジャズとクラシックの融合といっても、アレンジの仕方は多彩であり、演奏が終わっても、聴衆の熱狂はいつまでやまない。

East Of The Sun (West Of The Moon)

菜の花や月は東に日は西に

これは与謝蕪村が一七七四年（安永三）の旧暦三月に詠んだ俳句である。大地には一面、菜の花が咲き乱れ、東の稜線からは月が昇り、日は西に沈みつつある。目に飛び込んでくる視覚的な鮮やかさと、天地をこの眼でとらえる魂の広がりを感じさせる。現代人の感覚にも響く名句である。

ところで、ジャズの名曲に「イースト・オブ・ザ・サン」East Of The Sun (West Of The Moon) というのがある。無理に訳せば「日は東に月は西に」といったところか。これは一九三四年

に、当時大学生だったブルックス・ボウマン Brooks Bowman
によって作曲され、ジャズのスタンダードとして、多くのアー
チストに演奏されてきた。希望を感じさせる、明るいタツチの
メロディーであるが、作曲家自身は自動車事故で、二四歳の誕
生日を目前にして死亡した。

僕が初めてこの曲の題名を見たとき、与謝蕪村の名句を思い
浮かべてしまった。あとで確認してみたら、蕪村の句の方は夕
刻の情景であり、ジャズの方は早朝である。日出づる国の句が
夕日で、星条旗の国の曲が朝日なのは、ちよつと意外な気がし
た。ちなみに、ジャズはアドリブが命であるから、即興とい
う点では俳句の精神に通じそうである。

余談はこれくらいにして、「イースト・オブ・ザ・サン」の
聴き比べをしてみた。ジャズは同じアーチストでも、演奏する
時によって、スタイルがかなり異なる。乗りの良さが演奏の善
し悪しあを決定する。

この曲の演奏といえば、まずチャーリー・パーカー Charlie
Parker を思い浮かべるだろう。僕が持っている同曲の中では、
パーカーの演奏が一番多い。よく知られているのが、チャーリー
・パーカー・ウィズ・ストリングス Charlie Parker With
Strings によるアルバム《パリの四月》April In Paris に収められ
た演奏。パーカーの名演奏といえば、ダイヤル版やサヴォイ版
を挙げる人が多い。ヴァーヴが出したこのアルバムは、録音状
態がとても良いので、ジャズに慣れていない人には、オーケス

トラとの調和を重んじて、アドリブも控えめな演奏は耳に快いだろう。逆にジャズ愛好者には、オーケストラの演奏が邪魔だし、メロディーから大きく外れることがないので、想像力が不足しているとか、マイナスの評価が下されることがある。とはいっても、この演奏が均整の取れた美しさをたたえていることには変わりがない。

サヴォイ版の《ザ・コンプリート・ロイヤル・ルースト・ライブ・レコーディング・オン・サヴォイ・イヤーズ2》*The Complete Royal Roost Live Recordings On Savoy Years Vol. 2*の同曲は、落ち着きのある演奏であるが、挑戦する感じが乏しく物足りない。《コンプリート・バード・アット・ジ・オープン・ドア》*Complete Bird at the Open Door* は、ライブ演奏として

は音質が良好なので、パーカーの生演奏が聴けない我々にとっては、会場の空気感をとらえるのにはいいが、パーカーの炸裂さくれつしたようなところがない。

僕がパーカーによる同曲の演奏で、最も好きなものは、《コンプリート・ライブ・アット・ザ・ロックランド・パレス》*Complete Live At The Rockland Palace* の冒頭に収録されている曲である。オーケストラと共演している点では、チャーリー・パーカー・ウィズ・ストリングスによる《パリの四月》と同じだが、このライブではオーケストラに遠慮することなく、胸が張り裂けるような思いで、サククスを吹いている。本来は明るいはずのメロディーが、自己の運命を悟ったような悲痛な叫びを伝えてくる。

ちなみに、このアルバムに収められた「オーニソロジー」Ornithology も絶好調の演奏で、ダイヤル版の「チャーリー・パーカー・ストーリー・オン・ダイヤル1 ウェストコースト・デーズ」《Charlie Parker Story on Dial, Vol. 1, Westcoast Days》所収のものより、かえってパーカーらしさがよく出ていると思う。このアルバムの欠点としては、録音状態がいま一つで、音が割れているところである。

チャーリー・パーカーのそっくりさんといえば、ソニー・ステイット **Sonny Sitt** のことで、パーカーの生前はアルトからテナーのサククスに切り替えていたほど、パーカーの亜流と見られることを嫌っていた。ステイット自身は若い頃、かなりい

い演奏をしているのだが、パーカーと正面切つての対決では勝ち目はない。パーカーと吹き方が似ているのは、偶然の一致とも言われているから、パーカーという天才が存在しなかったら、ステイットがジャズの歴史を変えていたかもしれない。

「イースト・オブ・ザ・サン」の演奏は、アルバム《パーソナル・アピアランス》《Personal Appearance》に収録されている。このアルバム自体は、若い頃の演奏にしてはステイットの冴えが乏しい。アドリブも結構やっているのだが、お決まりの手を使っている感じで、パーカーの魂がこもった演奏からはほど遠い。曲の調子は比較的明るいから、パーカーがサヴオイのロイヤル・ルースト **Royal Roost** のライブで行った演奏に、印象としては似ている。

ビーバップ *Bebop* と呼ばれるアドリブが続くスタイルを、サクソスのチャーリー・パーカーやトランペットのデイジー・ガレスピー *Dizzy Gillespie* と作り上げたのが、ピアノのバド・パウエル *Bud Powell* である。神がかった超人的な早業の演奏は、《バド・パウエルによるピアノ演奏》 *Piano Interpretations By Bud Powell* に収められた同曲からは、すでに感じられなくなっている。一九五六年にリリースされたこのアルバムは、前年の四月にニューヨークのスタジオで録音されたもので、一九四〇年代のきらびやかな、神が降臨するような恍惚感はないが、温かみのある抒情は感じられる。

ビーバップをオルガンの分野で確立したのが、ジミー・スミス *Jimmy Smith* である。ジミー・スミスといえば、ファンキー、つまり、野性味あふれた演奏で知られている。オルガンを「教会で賛美歌を歌うための楽器」と思い込んでいる老人が、ジミー・スミスの曲を聴いたら、卒倒してしまいそうな、クールでかっこいい乗りの良さである。《ザ・サーモン》 *The Salmon* や《ルート・ダウン》 *Root Down* 《ザ・キャット》 *The Cat* が代表作とされるが、僕が一番好きなのは、《プレイズ・プリティ・ジャスト・フォー・ユー》 *Plays Pretty Just For You* である。スタンダードの曲が集められていることもあるが、かっこよさと温かさがバランスとれていて、リラククスした高揚感に導いてくれる。特に「イースト・オブ・ザ・サン」は、ジミー・ス

ミスの良さが前面に出ており、もし彼の演奏を初めて聴くのだ
ったら、代表作でいきなり打ちのめされるより、このアルバム
を聴いて好きになってからにしてほしい。

テナー・サクスの巨匠、スタン・ゲッツ Stan Getz が死の
直前に、ケニー・バロン Kenny Barron と共演したアルバム、「ピ
ープル・タイム」People Time にも、「イースト・オブ・ザ・サ
ン」は収められている。ジャズの神様と言われたチャーリー・
パーカーでさえ、死が近づくにつれて不調に陥ったのに、スタ
ン・ゲッツは末期癌に冒されながらも、ますます魂に響く演奏
をしている。自分の人生を眺め渡して、折々の思いをすべてサ
ックスの音に込めている。これが最後かもという思いが頭をよ

ぎったろうが、人生に対して満たされた思いも同時に感じさせ
る。息苦しさに耐えて、サククスから口を離している間、ケニ
ー・バロンのきめの細かい、一点の間もないピアノ演奏が続く。
スタン・ゲッツのサククスを際立たせようと、地味な演奏をし
ているけれども、巨匠の精神的な高さに負けまいとして、ケニ
ー・バロンの演奏の中では最良のものとなっている。

なお、ケニー・バロンには、「コンファメーション」
Confirmation というライブ録音があり、僕が愛聴しているアル
バムの一つである。こちらでは、ケニー・バロンは誰に遠慮す
ることなく、自己の才能のすべてを示している。リラックスし
た導入部に続いて、軽妙なアドリブを余裕たっぷりに見せなが
ら、高みの世界へと聴衆をいざなっていく。バド・パウエルに

引けを取らない、ビーバップのピアニストである。

アルト・サクスのプレーヤーの中で、チャーリー・パーカーとともに強い愛着を覚えるのは、アート・ペッパー Art Pepper なのだが、感情を驚づかみにする大胆さと、繊細なサクスの音色で、アート・ペッパーに近い演奏をしている（？と僕が勝手に思っている）のが、ジョルジュ・ロベール George Robert である。サクスの音はやや苦みが効いているから、後期ペッパーの演奏に近い。彼がケニー・バロンと共演しているのが、《インスピレーション》Inspiration というアルバムである。音程が外れそうになりながら、ピサの斜塔のように、アンバランスとバランスの綱渡りの妙技を見せるところも、アート

・ペッパーを想起させる。

《インスピレーション》はジョルジュ・ロベールとケニー・バロンの共演である。「イースト・オブ・ザ・サン」では、サクスが前面で響き渡っており、ケニー・バロンは脇役に徹している。二人の共演するアルバムとしては、《ピース》Peace の方が一般受けするだろうが、より個性を感じさせてくれるのは、《インスピレーション》Inspiration の方だろう。

なお、ジョルジュ・ロベールには、《メトロポール・オーケストラ》Metropole Orchestra という、管弦楽団と共演したアルバムもある。美しい響きが楽しめるけれども、チャーリー・パーカー・ウィズ・ストリングス Charlie Parker With Strings の場合と同様に、ジャズとしてのスリル感は味わえない。規定のメ

ロディーを淡々と吹いている、といった感じである。

Wynton Marsalis 《The Magic Hour》

ウイントン・マルサリス Wynton Marsalis というジャズ・トランペッターをご存じだろうか。アップル社の宣伝で、iPod を聴く男女がブルーを背景に影絵のように踊るビデオで、「スパークス」Sparks という曲を演奏していた人である。僕と年齢が近いこともあり、数年前まではスタンダード集をよく聴いていた。

ところが、いつの頃かぱったり聴かなくなってしまった。マルサリスのバンドにいたエリック・リード Eric Reed は、今でも僕の心をとらえて放さないのだが。チャーリー・パーカー Charlie Parker や Bud・パウエル Bud Powell、アート・ペッパ

ー Art Pepper、マイルス・デイビス Miles Davis など、個性的な音を出すアーチストを聴いていると、マルサリスの演奏が、テクニクはすごいが、あく抜きしたお上品なものにしか聞こえなくなってしまうのだ。

ジャズ・ミュージシャンといえば、麻薬中毒者、性格も激しくて、精神病院に入れられたり、ドラッグのためなら窃盗、強盗もするし、一度も刑務所に入らないのは本物ではない、とさえ思われている。先に挙げたミュージシャンもそうで、六十代まで生きられたマイルス・デイビスにしても、麻薬中毒で体を壊しているし、警察に連行されたこともあり、本当は人柄がいいのだが、周囲のアーティストに恐れられていたという。

そうした本物のジャズを聴かされると、マルサリスの演奏が物足りない気がしてしまうのだ。父親をピアニストに持つ音楽一家に生まれ、ジャズというよりはクラシックの演奏家のような環境で育った。マルサリスは勉強家で、ジャズを伝統としてとらえている。新しい音楽を生み出すカオスとは、遠いところに存在しているのかもしれない。

さらに、マルサリスに対する僕の印象が損なわれたのは、『マイルス・デイビス自伝』の記述によってだった。デイビスが演奏しているところに、マルサリスが現れ、勝手に舞台の上まで上がってきた。父親と息子ほどの年齢の差があるマルサリスが、デイビスのステージでおしゃべりを始めたものだから、デイビスは痲癩かんしゃくを起こして、出て行けと大声で怒鳴ったという。デイビスとは人間としては対等だとしても、アーティストとして

の格は全然違うだろうに。

ウイントン・マルサリスについて、否定的なことばかり書いてしまったが、ライブでは彼なりにいい演奏もしている。二〇〇六年、リンカーン・センター Lincoln Center で録画されたもので、曲名は「マジック・アワー」The Magic Hour (Live In San Jose) で、アルバム《ライブ・セッション》Live Session (iTunes Exclusive) に収録されている。アーティストは以下の通り。トランペットがウイントン・マルサリス Wynton Marsalis、ピアノがダン・ニマー Dan Nimmer、ベースがカルロス・ヘンリケス Carlos Henriquez、ドラムセットがアリ・ジャクソン Ali Jackson である。

冒頭でアップル社のステイブ・ジョブズ Steve Jobs が、マルサリスの紹介をしている。オレンジがかった照明の中、異様に緊張した空間が広がる。呪文めいたマルサリスの演奏から始まり、夜の舞台で練り広げられる、陽気なサバトの饗宴といった趣がある。一瞬の隙もない演奏である。ビデオだと会場の緊張が肌で伝わってくるからいい。途中から演奏はリラックスティした穏やかなものとなり、音楽の世界に身を浸す幸福を教えてくれる。

なお、マルサリスのアルバム『マジック・アワー』The Magic Hour にも同名の曲があるが、全くの別バージョンであり、聴き比べてみる価値はあると思うが、iTunes 専売の《ライブ・セッション》におけるような、緊張と安らぎに満ちた、絶妙な美

しさは感じられない。

ただ、聴き直してみると、『マジック・アワー』所収の同名の曲を、過小評価していたことに気がついた。ジャズの命はアドリブで、毎回の演奏が異なるのは当然である。さまざまなバージョンがあつていいわけで、アドリブの形が異なるだけで、これしかないという形で記憶されたライブのメロディーとのずれを、ことさらに感じてしまったのだろう。単独で聴いていれば、決して悪いわけではない。スタジオ録音であるために、会場の張り詰めた空気は感じられないのだが。

どちらがいいかは、聴き比べればいいわけだが、iTunes 専売の《ライブ・セッション》《Live Session (iTunes Exclusive)》は、

どういうわけか、iTunes Store でもう売られていない。そうしたら、YouTube で流されているのを知った。ここにリンクを張っておこう。

動画について検索していたら、マルサリスが同名の曲を、別のライブでも演奏していて、これまた YouTube に流されていた。The Magic Hour - Wynton Marsalis Quintet at Ronnie Scott's 2011である。こちらは二十分以上の長さがあり、アット・ホームな雰囲気の中で、マルサリスと聴衆との心の交流が肌で感じられる。リラクセスした中で、円熟した余裕ある演奏をしている。

Eric Reed 《From My Heart》

ジャズ・ピアノの分野で、皆さんはどんな演奏に惹かれるのだろうか。僕はレストランでかかっているような、BGM は好きじゃない。ムードを作るだけの曲は、心に響いては来ないからだ。ビーバップ Bebop と呼ばれる即興演奏を競うスタイルはよく聴く。神がかった演奏をするバド・パウエル Bud Powell や、それに連なるトミー・フラナガン Tommy Flanagan、ケニー・バロン Kenny Barron は、僕がとりわけ好きなピアニストである。すさまじい速さでアレンジしていく感性は、聴く者の精神を高揚させてくれる。

それとはちよつと違うのだが、深い精神性をたたえていて、

弾く音一つ一つに愛情が感じられ、間の取り方が絶妙なピアニストが、まだ若いエリック・リード Eric Reed である。一九七〇年にアメリカのフィラデルフィアに生まれ、十七歳の年に、トランペット奏者のウイントン・マルサリス Wynton Marsalis と出会い、公式にそのバンドに属するようになった。

ここで紹介する《フロム・マイ・ハート》From My Heart は、リーダーとしてプロデビューしてから、十年以上経った二〇〇二年のアルバムで、ビートルズで有名な「イエスタデイ」Yesterday に始まり、ジャズのスタンダード・ナンバーを、優しく繊細なタッチで演奏していく。「海は何て深いんだろう」「How Deep Is The Ocean」や「君を愛さずにはいられない」「I'll Never Stop Loving You」なども美しいのだが、「フラメンコ・ス

「ケッチズ」Flamenco Sketches はマイルス・デイビス Miles Davis のトランペットとはまた違った、超絶した美の音空間を作り出している。

Eric Reed 《Plenty Swing, Plenty Soul》

スタジオでの録音と異なり、ライブの良いところは、演奏家と聴衆の間に相乗作用が働く点である。とりわけ、即興のアドリブが命であるジャズにおいては、演奏が聴衆を沸かせ、高揚した雰囲気さらに乗りのいい演奏を引き出すからである。

《マンハッタン・メロディーズ》Manhattan Melodies で、都市のせわしない日常に垣間見られる抒情を、抑制されたクールなタッチで表現したエリック・リード Eric Reed は、《フロム・マイ・ハート》From My Heart では、スタンダードの名曲を、繊細な魂による心温まるタッチで表現した。いずれもスタジオ録音であり、ライブではどのような演奏をするか、かねてより

興味深く思っていた。

《ブレンティ・スウィング・ブレンティ・ソウル》Plenty Swing, Plenty Soul は、エリック・リードと、同じくピアニストのサイラス・チェスナット Cyrus Chestnut の共演によるライブ録音であり、意気投合した二人の演奏を聞き分けるのは容易ではない。

このアルバムでは、躍動的なスウィングと、繊細な持ち味が見事に融合している。1曲目の「四月の思い出」I'll Remember April では、温かいまなざしを感じさせるメロディーを、神業としか思えない速さで弾いている。2曲目の「君は我がすべて」All The Thing You Are では、心の裏を丁寧にたどり、悲しみや憂いまで、相手のすべてを受け入れる優しさに満ちている。3

曲目の「ツー・バス・ヒット」Two Bass Hit は、ダイナミックな激しさを持つ原曲を、極限まで探究しようという意思の賜物である。6曲目の「祈り」Prayer は、魂の最も深い部分の発露であり、最後の7曲目はアルバムのタイトルとなった曲で、ピアニストが持つ技術の高さと深さを、改めて認識させてくれる。

これほどの多様な表現を可能としたのは、サイラス・チェスナットとの共演であり、反応を肌で感じられるライブという場にあって、自身の可能性をすべて明らかにしようという意気込みだろう。

Jasper Vant Hof 《Meditation》

僕がこのアルバムと出会ったのは、まだ二十代の頃だった。当時、古神道関係の出版社八幡書店の目録で、優れた瞑想音楽として勧められていたので、入手することにしたのである。効能があるかどうかは別として、高度な演奏技術と、動と静、間の感覚をとらえる鋭敏な感性に支えられていると感じた。このアルバムを聴きながら、真夜中によく思索に耽^{ふけ}っていたものである。

ヤスパール・ファントフ Jasper Vant Hof はオランダ生まれのジャズ・ピアニストである。しかし、ジャズやクラシックといった、特定のジャンルにとらわれることを好まない。その点で

はキース・ジャレット Keith Jarrett 辺りを連想させるかもしれない。ピアノを弾きながら、自ずと鼻歌のようなハミングが出てしまう点も。

ピアノのソロ・アルバム《メディテーション》Meditation を聴いて感じるのは、クラシック音楽の繊細さと、ジャズのような自由な感覚、現代音楽の持つ抽象性、ニューエイジ・ミュージックがもたらす癒し、それも出来合いの癒しではない、常に新鮮な驚きの融合である。

1 曲目の「ピポ」Pipo では、クラシック風の典雅^{てんが}な演奏から入り、2 曲目の「チルドレン」Children ではピアノのキーの一音一音を、心に響かせるような弾き方をする。3 曲目の「インターコース」Intercourse や 5 曲目の「ミナレット」Minarettes、

6曲目の「カレッツァ」Karezza では、現代音楽風の万華鏡のように、きらめきながら躍動する音の波に浸らしてくれる。8曲目の「ヨハンナのための子守歌」Lullaby for Johannaでは、優しく穏やかでありながら、不思議な音の戯れである子守歌が、聴く者の魂を包み込んでくれる。

とらえどころがないから、メロディーを記憶することなどできないが、何度聴いてもみずみずしさにあふれている。改めて全曲を聴き直して、このアルバムの素晴らしさに息を呑んだ。

小川隆夫『名盤のウラに記された真実』

僕がまだ大学生だった頃、いい音で聴こうと思ったら、LPを買うしかなかった。一枚二千円から三千円する大きな円盤は、カバンの中には入らないし、傷つきやすかったから、買うのは自転車に乗れない雨の日だった。気に入らなかったからもう一枚買う余裕は、当時の僕にはなかった。その代わり、気に入った曲はテープにダビングして、気が済むまで何度でも聴き、LPに同封されたライナー・ノートも繰り返し読んだ。そのため、頭の中でメロディーを再現できるほどだった。

僕が多少なりとも、ジャズに詳しくなったのも、千単位の曲を聴いてきたからだ。それが可能になったのは、割安な音楽配

信のアルバムをダウンロードしたり、TSUTAYAなどでCDを借りてくるようになったためだ。CDを買うにしても、海外からの輸入盤は日本国内の盤に比べて、半額くらい値段である。さらに、スマートフォンが普及することで、外出中もネットラジオが聴き放題になった。

音楽配信の良い点は、アルバムを全曲買う必要がないのと、試聴ができるという点である。ただし、アルバムはアーティストが構成を考慮した作品、詩で喻えるなら詩集に当たるわけだから、現在はアルバム全体を買って、最後の曲まで聴くようにしている。良くない点は、圧縮された曲は音質が劣ること。携帯端末で聴く分には大して気にならないが、自宅のオーディオで聴くと、迫力の点でかなり劣る。張り子の虎みたいで体に響

いてくるものがない。まあ、平日はうちでゆっくり聴けないから、それは目をつぶるとして、何よりもつまらなく感じるのは、mp3にはライナー・ノートがついていないことだ。いくら多くの曲を聴いても、演奏がどのような背景でされたかという知識が、一向に増えないのである。しかも、アドリブが命のジャズでは、同じアーティストによる同じ題名の曲でも、毎回の演奏が異なるわけだから、ライナー・ノートがないのは痛い。

そんなときに見つけたのが、小川隆夫氏の『名盤のウラに記された真実』である。この手のジャズ解説本は、本屋で見かけるのだが、年中持ち歩く気にはならない。小川氏は本職は整形外科医なのだが、ジャズの造詣ぞうけいが深く、多数の著書が出版され

ている。LP のライナー・ノートを引用しながら、小川氏自身の印象をまとめたのが本書の内容である。

ところが、同書は電子書籍の形態を取っているので、スマートフォンの中に入れておき、気が向いたときに目を通すことができる。iPad 版は二分冊だが、iPhone 版は一冊なので割安となっている。九百円するけれども、iPhone 版で一三九五ページもある。そんな分量が紙の本だったら、書棚に飾るインテリアになってしまう。時間の合間に、少しずつ読んでいけるのがいいのである。

扱われているアーティストは、ジョン・コルトレーン John Coltrane、ウェス・モンゴメリー Wes Montgomery、ソニー・ロリンズ Sonny Rollins、アート・ブレイキー Art Blakey、アー

ト・ペッパー Art Pepper、スタン・ゲッツ Stan Getz、キース・ジャレット Keith Jarrett、ビリー・ホリデイ Billie Holiday、リ・モーガン Lee Morgan、セロニアス・モンク Thelonious Monk、ウエイン・ショーター Wayne Shorter、オスカー・ピーターソン Oscar Peterson、マイルス・デイビス Miles Davis、キヤノンボール・アダレイ Cannonball Adderley、フレディ・ハーバード Freddie Hubbard、ハービー・ハンコック Herbie Hancock、ビル・エヴァンス Bill Evans の十七名。

僕が好きなビーバップ Bebop のアーティスト、ジャズの神様であるチャーリー・パーカー Charles Parker やデイジー・ガレスピー Dizzy Gillespie、バド・パウエル Bud Powell が抜けているのは残念だけれども、まだ聴いていない名盤の多くを、僕

は同書から知ることができた。

あと、この本の良いところは、電子書籍の利点を生かして、LP版のジャケットをバーチャルながら見せてくれること、手で弾くと裏側も見せてくれる。さらに、CDやiTunes Storeから楽曲を購入できるリンクも張っている。デザインも凝っていてかっこいい。思い出したら、ポケットから取り出して、何度でも読み返してみよう。

なお、電子書籍『名盤のウラに記された真実』は、iTunes Storeでは販売中止になっている。ポケットに入れておき、いつでも参照できるから重宝ちようほうしていたのだが。ほぼ同じ内容は紙の本として、『ジャケ裏の真実 ジャズ・ジャイアンツ編』（駒草

出版）の題で刊行されている。ただ、紙媒体の場合、分量の制限があるので、説明の一部は割愛かつあいしてあるという。

『ジャズの教科書』

ジャズのリスナーとしては、すでに初心者ではないのだが、コンビニで『ジャズの教科書』という雑誌を買ってみた。チャーリー・パーカー Charles Parker、マイルス・デイビス Miles Davis、セロニアス・モンク Thelonious Monk、ジョン・コルトマン John Coltrane、ビル・エヴァンス Bill Evans、エリック・ドルフィー Eric Dolphy、キース・ジャレット Keith Jarrett の計7名の説明は、ジャズの愛好者にとつては、復習したいなものなのだが、知識を整理する役には立つだろう。

ジャズ楽器の解説では、サククス、トランペット、ベース、ピアノ、ドラムス、ギターなどの説明はあるのだが、ジミー・

スミス Jimmy Smith のオルガンについての説明もほしかった。教会音楽に使われる楽器が、ファンキーな演奏を生み出す点など、実に興味深いからである。ジャズの歴史については、巨人たちが活躍していた頃は、まだ幼児だった僕には知らない逸話が多かった。

一番興味を持ったのは、ジャズ喫茶に関する情報だった。もっぱら CD で聴いているのでは、映画を借りてきた DVD で見ているのと同じである。海外のライブとまではいかなくても、独特の雰囲気のあるジャズ喫茶の店内で、しかも年配のリスナーしか持っていない LP の音が聴ける店の個性が、写真付きで解説されているのである。ドアを開けてみたくなる店がいくつもあった。

この雑誌がお買い得なのは、澤野工房のCDから抜粋された曲が、1枚のCDにまとめられて付属している点である。収録されているアーティストは、山中千尋^{ちひろ}、ロバート・ラカトシュ Robert Lakatos、サヒブ・シハブ Sahib Shihab、ウラジミール・シヤフランノフ Vladimir Shafanov、トヌー・ナイソー Tonu Naissou である。編成と聴きどころの解説付きで、価格は外税で七四〇円、出版元は学研である。